

第二章 章華台

韋莊が知るのは、幼いころより馴染んでいた一つの己である。韋家に生まれたからにはそうなるべき己であり、自ずとそうなりつつある己だ。貢挙は、この一つの己を完成に導くには合格しなければならぬものだった。

このあるべき己の他に、そうではない別の己があるとは、思い描けない。とはいいながら、現実には貢挙に落第し、己を完成させる道筋に重大な齟齬が生じた。むろんそれはあくまでも一時的であって、再び正しい歩みに戻ればよいだけなのだが、そうすることも思い描き難い。ならばどうするのか。號州に帰った翌日より、高熱を発して床に臥せった。意識が朦朧として夜も昼もわからず、暑いさなかでありながら、閉め切った部屋で寝続けた。従弟の韋蘭の煎じる薬が効いて、五日ほどで熱が引いた。

起きる気力はなかなか生まれず、しばらくは、韋蘭が笛を吹き、韋莠が碁石を置き、韋藹が朗読するのをぼんやり聞きながら、横になっていた。日を追って、老婆が煮る粥の味もわかるようになり、時に窓を開けて涼みもするようになった。しかし、人が近づいてくる気配が外にすると、胸が高鳴り、慌てて窓を鎖して榻に横たわらねばならない。

そのような状態がさらに十日ほどもあつてから、家の中でなら起きていられるようになった。まだはつきりしない頭で、徒然の慰めとなるのは藹の朗誦だ。澄んだその声を聞くと、その間ばかりは気持ちちが落ち着く。中でも史書が面白く感じられる。気に入った箇所を弟に繰り返し朗誦させる。弟はむしろ同じことの繰り返し喜ぶ。

例えば『三国志』の田疇（でん ちゆう）の伝記だ。以前にも読んだのだが、藹の声で聞くとことのほか興味をそそられる。

田疇とは漢代の終わりの人だ。漢朝の命運は風前の灯。皇后の親族である外戚、皇帝の使用人の宦官、学問を修めた儒官、この三つ巴の権力抗争の果

てに朝廷は衰亡し、実権は地方の軍閥に移った。とりわけ獐猛な董卓（とうた）
く將軍が都の洛陽に乗り込んで皇帝をひつ捕らえ、長安に連れ去った。劉虞
（りゅうぐ）という人が、世にはなお皇帝に節義を捧げる者がいると、皇帝に
知らせるべく、田疇を長安に派遣した。田疇は賊が充満する危険な道を長安
へと走り、皇帝に会い、劉虞への返書を授けられた。劉虞は田疇が帰り着く
前に殺された。「劉虞の仇を討てないのなら吾は世に出ない」。田疇はこう言
って、徐無山の奥に入り、土地を開き、自ら耕して父母を養った。田疇の節
義は人々の慕うところとなり、漢王朝が滅びようとする際に、徐無山には五
千余家からなる村ができあがった。

我が莊園が徐無山にあるものならばと、韋莊は夢想する。悲しいかな、己
には田疇のような節義を貫く強さはなく、人々に慕われてもいない。たとえ
人々が集まってきたても、それに囲まれるのは苦手だ。とりわけいまは誰にも
会いたくない。弟の家に来てから、二人の弟と韋蘭と楊爺と老婆の他には誰
とも顔を合わせていない。

韋荘が高熱を出したというので、薛未亡人が女たちを連れて見舞いにきた。具合の悪さを韋蘭が説明し、体良く帰ってもらった。

薛未亡人は依怙地な女である。不平不満を胸にしまっておかず、怒りとともに外に吐き出す。屋敷では毎日のように薛未亡人の罵声が聞かれる。叔父の韋韜はここ十年来、聞こえぬ振りを決め込んでいる。薛未亡人の了見の狭さを韋荘も好ましく思っていないが、薛未亡人の方はどういう訳か韋荘に好感を持っている。見舞いの際にも、韋荘の好む食べ物をいろいろ揃えてきた。

薛未亡人と韋荘の妻は犬猿の仲である。「あんな女を妻に持たされて、ほんと可哀そう」と、韋荘に同情している。韋荘の縁談を決めたのは叔父の韋韜で、薛未亡人は何の相談も受けていなかった。嫁にくる前から気に入らず、きてからは、双方ともに気性の激しきで譲らず、いがみ合った。「千年生きても、蠅一匹捕まえない間抜け者」である韋韜に、韋家の大事な嫁を決めさせたのは大間違いだったと、薛未亡人は文句を言う。

薛未亡人がわざわざたくさんの食べ物を持ってきてくれた意図は、韋荘に

はわからなかったが、くれるものはありがたく頂戴した。それも韋荘の回復の助けになったのだろうか、莠と碁を打てるくらいになる。外には出ないの
で、長安からの道中で日焼けした顔もすっかり白くなる。

こうしたことから、「二三日したら釣りでもするか」と叔父が言っていたのが実現したのは、結局、それからひと月余り経った夏の真盛りだった。

たまたま二日ほど降り続いた雨のおかげで大地が冷やされ、そのせいか、珍しく霧が立ち込めた早朝に、叔父が一人でやってきた。

「どうかな、約束の日がきたように思うのだが」

よい潮時だった。韋荘は、虢州に帰って初めてと言える心地良い目覚めを得ていた。外に出てみたい気分が湧き上がりつつあって、しかもうつつつけの霧だ。

久しぶりに地面を踏み、誰にも見とがめられずに水路に沿う小道を歩いて桑畑の下の三叉路に至る。同行するのは韋蘭だけだ。

行く手から足音が聞こえる。韋荘は反射的にぎくりとするが、よく聞けば

わかる、これは楊爺だ。灰色の四角い影が霧の中にぼんやりと浮かび出てくる。

叔父が言う。

「ちようどよかった。釣りの道具を持って、釣魚棚にきてくれまいか」

その指図を受けて、楊爺は小屋の方へと取って返す。

三人は楊爺が去っていった道をゆったりと進む。湿った軟らかい土だ。

釣魚棚とは、池に向かって突き出す岩だ。釣り糸を垂れるに絶好の場所である。叔父はそこか、楊爺の操る小舟のどちらかで釣りをする。

道がまた二つに分かれる。右は上り坂で、莊園で最も高い南山に至る。左が狐潭の池に通じる。

小さな坂を少しばかり登ると、狐潭を堰き止めている堤の上に出る。

狐潭は、何時の時代だかに造られた人工の池だ。丘の間を流れる川をこの堤で堰き止めているので、池はもとの流路のままに細長く屈曲している。もしも空から池を眺めたならば、狐が両手両足を伸ばして飛び跳ねる姿に似て

いるので、この名があるというこらしい。あるいは、この池はどのような日照りの年にも水の涸れることがなく、それは狐の靈術によるのだともいう。実際に、池の畔には狐を祀った古く立派な祠があったらしい。韋家がこの一帯を手に入れたころには、その言い伝えが残るだけで、祠がどこにあったのかも定かでなくなっていた。楊爺が韋莊の妻に嫌われてこの池の岸边に一人で住み、池の管理を仕事とするようになってから、ごく小さい狐の祠を一人で再建した。毎日、供え物を捧げるその祠は、南山への坂を少し登ったところにある。

堤の上に立つと、池を一周する小径が始まる。右は楊爺の小屋へ、左は釣魚棚へ至る。どちらの道も霧のために数歩先しか見えない。池も足元に水がわずかにのぞくだけ。くぐもったような声で鳥が鳴き交わしている。鳥も魚も木々も驚かせまいと、叔父は特にゆっくりとした歩みになる。

晴れば、真夏の太陽が肌を刺すのだろうが、霧の漂う空気は柔らかく涼しい。外に出られたのはこの霧のおかげだ。弟の家で息を潜めていた間に夏

は盛りに至り、この涼気は秋へと転じる最初であるのかも知れない。

ふと焦燥感を覚える。

己はどうしたらよいのか。とりあえず何かすべきことはない。ひと月だろ
うがふた月だろうが、寝ていたって構わない。あるべき己になる道は鎖され
た。もうその道を急ぐ理由はない。それなのに焦りが生じる。

釣魚棚に到着する。

岩の上に乗ると、水を打つ音が静かに近づいてくる。少し薄くなった霧の
先に、楊爺の小舟が姿を現す。

楊爺は舟を泊め、昨夜の雨とこの霧で濡れる岩の上に、藁の敷物を手際よ
く広げ、叔父、韋荘、韋蘭の三人に一本ずつ竿を渡す。三人は銘々好みの場
所を占める。楊爺は三人が糸を垂れる背後で、針にかかった魚を受ける網の
修繕を始める。

糸の先を見つめていると、楊爺が低く何やらつぶやいている。独り言かと、
その声に注意を向けると、このようなことを言っている。

「お狐さまも、いつかは盛大なお祭をいたしましょう。お狐さまに喜んでいただければ、お家もきつと繁盛いたしましょう。お狐さまのお好きなものをたくさんこしらえてお供えしましょう」

ただの独り言ではなさそうだ。韋家にこのところ運が向いていないのは狐の神を大切にしていけないからだ、楊爺は常々思っている節がある。つぶやきを二人に聞かせたいようだ。

楊爺が長いこと言い続けるので、叔父も聞かぬ振りばかりもしていられぬと、

「いずれは、そうすることもあるだろうか」
ぼそつとつぶやく。

叔父は、狐神（こしん）については、小さな祠を楊爺が守ってくれていれば十分と思っている。

「ぜひともいたしましょう。お屋敷もきつと見違えるようになります」
楊爺はにわかに力を込める。

叔父は答えない。

韋蘭は、一向に何もかかってこない竿を脇に置き、大きく伸びをし、

「狐っていうのは、そんなに力があるものですかな」

楊爺は、待つてましたとばかりに、

「お狐さまのお力はたいしたものでございますとも。とりわけ昔の時代は。

この池も、皆さま方も知っておられますよう、水が涸れないのは、お狐さまのお蔭にございます。そもそもこんなにも立派な池ができあがったのも、もちろんお狐さまのお力です。お狐さまはそれはそれはたいしたものでございます。しかし、ここでのお祭もいつか絶えてしまいましたように、このところ、どうやら世の中と同じなのか、衰えてきてしまったようでございます」

「ほう。面白そうな説ですな。狐も世とともに一緒に衰退しているとは」

「まあ、世の中のことはこの爺にはよくわかりませんが、たぶんそうなのでございましょう。それにつきましてこんな話があるのですが、お坊ちやま方はお聞きになりますか」

蘭は笑い、

「もったいぶらずに、俺たちに聞かせたくて言い出したのだろう。話してくれませんか。親父殿も、ほら聞きたがっている御様子ですな」

叔父にはそんな様子はない。静かに糸を垂らしたまま動かない。かと言って、拒絶するのでもない。

「であります。御遠慮申した方が良いでしょう。旦那さまの御一族にあるいはいくら関わりのありそうな話なのでございます」

「ますます面白そう。これは、聞かすにはおられません」

「御一族は都の南の杜陵のお出でございましょう。その杜陵の韋氏にあったこととして、この爺が若いころに、都でよく人の口に乗っていた話でございます」

「ほう、それで、我等一族と関係があるのかも知れないのか。いよいよ聞きたくまりましたな」

韋荘は、釣り糸の先を見守っている訳でもなく、楊爺の話に耳を傾ける訳

でもない。楊爺の音がするから聞こえ、竿を持っているから目に入ってくるだけだ。

霧が動いて岩の前の水面が少し開けてくる。池はここで「く」の字に折れ曲がり、狐潭の中でもとりわけ興趣ある場所だ。斜め向こうの奥に楊爺の小屋があるが、それはまだ霧の向こうだ。

「この消えゆく霧のように、どこかへといなくなってしまうおうか」
ふとそのように考える。

「韋氏のある若者が、十里余り離れた別墅へと歩いておりました。日暮れが迫っておりますので、若者の足は自ずと早まりまして、ずんずんと進んでまいりますと、向こうから、同じように、ずんずんと近づいてくる人影がございます。その姿が遠くのくく小さいうちから若者の目をとらえましたのは、真つ白な衣服がことのほか目立ったからでございます」

韋荘が幼かったころ、楊爺は膝の上に乗せていろいろな話を聞かせてくれたものだ。妖鬼や神仙が登場する筋の通らぬものばかりだった。

「互いに近づきつつも、前からきますのは滅法速く、たちまち若者の目の前に立ちましたのは、それはそれは美しい女でございました。手にひとつ提げる瓢は目にも鮮やかに彩色されています。女は足を止め、『どうぞお助けください』と、いきなり若者にすがりつきます」

霧と水面の間に隙間が広がり、首を上げると、上空はほんのりと青味がかっている。

「この霧とともに消えよう」

貢奉のための勉強をする元の己に戻れないのなら、そうするよりないと、韋荘は思う。

「若者がびつくりして身を引くと、女は迫ってきて、『夢でお告げがあったのでございます。南に真っ直ぐに進み、最初に会った人に頼めばきっと救われると。それで今朝より歩き始めまして、この夕刻となって、初めてあなたさまに会えたのでございます。あなたさまこそ私をお救いくださる方なのでございます』。膝にとりつく女の顔はひどく哀れで、いやがうえにも美しさを

増しましたので、『私にできることならば』。若者は女の手を取って、つい答えてしまったのでございます。女は、『恥ずかしながら、私の家ははなはだ貧乏でありまして、無道な村役人のために言うに言われぬ辱めを受けました』と顔を赤くします。若者は握った女の手の軟らかな感触に、さらに『きつと私が力になりますよ』と、力いっぱい答えたのでございます」

「貧乏と言いながら、軟らかな手とはな」

韋蘭が口をはさむ。

霧は消えゆく速度を速め、真上にぼっかりと青空がのぞく。さつと日が射す。雨に濡れた木々が一斉に輝く。

池がまぶしいばかりの光に満たされ、心のうちにあつた重みがぼろりと落ちる。

燕が現れる。霧に代わって池の上の空間を我が物とする。自在に飛び回る動きを目で追う。

「燕たちがここを去る秋には、自分もここにはいない」

そう確信すると、楊爺の話がはつきりと耳に入るようになる。

「若者は憤慨し、こんなにも美しい女を辱めた役人を、非道だ何だと罵倒し、何とかしてやろうという気持ちをもめます強めたのでございます。女は頼みません。『もし紙と筆をお持ちであれば、私に代わって訴状を書いてはいただけませんか？』折よく紙筆を携えていた若者は、韋家の親類たちの助けも借りれば、役人どもをきつと懲らしめられるだろうと、躊躇なく女の望みを入れ、訴状はすぐさまできあがったのでございます。女はこのほかに喜び、衣中より輝く白玉の卮を出し、『まずは心ばかりのお礼でございます』と、瓢から酒を注いで、若者に勧めます。美しい女に酒をつがれば、若者の心はとろけ、日暮れの田野で、心躍る酒宴となったのでございます。若者が女の手をとって陶然として、一番星を見上げておりますと、西の彼方より馬の蹄の響きが近づいてまいります。女は身を堅くします。きましたのは、数頭の犬を先触れとして、狩を終えて帰りを急ぐ一行でございます。犬が吠えますと、女は身をひるがえして走り、東へ数十歩行って、たちまち狐に変じま

した。若者は仰天し、手の内の唇を見ますと、黒ずんだ髑髏に変じ、酒と思つて呑んでいたのは牛の小便だったのでございます」

蘭が笑う。

「そんなことだろうと思つて聞いていました」

「若者はそれから熱を發して病に伏せ、ひと月ほど苦しんでようやく癒えたのでございます」

蘭は手を打ち、

「何と、兄貴とそつくりではありませんか。兄貴も、牛の小便を、都の妓女にしこたま呑まされて帰ってきたのですな」

蘭の口の悪さはいつものことだ。一つの己しかないと思い込んでいたのは、あるいは狐にだまされていたためかも知れないと、妙なことを思つて、韋荘も思わず笑つてしまう。

よし、旅に出よう。狐に化かされたのではない本当の己を見つけよう。

「いえ、お坊ちやまのことではございません。お坊ちやまは狐にも妓女にだ

まされたりしません。そんなことではなくて、爺は、お狐さまの本当のお姿はこんなものではないと、申し上げたかったのでございます」

楊爺は韋莊のこととなると真剣だ。何につけても、韋莊が一番だと思っ
ている。

「ほう、本当はどういう姿なのですか」

「この話は、もともとは全く違う形だったのでないかと、爺は思うのでござ
います。後になって小ざかしいお役人たちが作り変えたのでございませ
う」

「これはますます面白い説が聞けそうですね」

蘭は楽しげだ。

旅に出るのなら、口の悪いこの従弟と一人だと思ふ。蛤雀先生の蘭に習い、
雀の絵を表にし、ふらりと二人一緒に莊園から消えれば良いのだ。

「もとは、役人に酷い目に遭わされた女がお狐さまに助けられた話だったは
ずでございます。酷い目に遭わされた女を哀れに思い、お狐さまが訴状を書

き、お上に訴え出て、女を救ったのでございましょう。そう言うことをしてくれたからこそ、どこにでもお狐さまをお祀りした祠があったのです」

「なるほど。そう言われると、そんな話があつても良さそうな気がしますな」

「牛の小便を飲まされたのは役人だったはずです。それがいつの間にか、女のために訴状を書いてやった若者が馬鹿を見る話に変えられたのでございます」

「楊爺は大したものですな。上に楯突くと狐に牛の小便を吞まされると、せっかくの話が無粋な教訓話に変えてしまったどこぞの利口者の陰謀を暴きましたな。これには兄貴も納得でしような」

韋莊は、旅に出るとしたらどの方角かと考えていた。話が急に自分に向けられ、

「まあそうかも知れない」

曖昧に答える。

「昔は狐も働き甲斐があつたでしょうな。訴状を出せば、お上が小役人ども

の不正をちゃんと裁いてくれたでしょうからな。いまなら、狐がどう頑張ったところで、訴状など出そうものなら、牛の小便ですめば御の字、重い仕置きを受け、一家の財産を掠め取られてしまうのが落ちでしょうな。人々を騙すことでは何枚もうわてのお上に、狐もかないっこありませんな。親父どのもそうは思いませんか」

叔父は竿を持つ手をわずかに動かし、

「下々の声は上つ方にはなかなか届かぬものだ」

「上に届いたところで、そこに正しい者がいなければ無意味ですな。天辺まで腐ってしまつては、狐にどんな神通力があつてもどうにもなりません。狐を敬う者がいなくなるのも当然ですな」

「お狐さまは、本来、私どもを助けてくださる有難い神さままでございました。お狐さまを大切にお祀りしないと、悪さをなさることもありますが、こんな変な話はわがままなお役人がでつちあげたもの。お狐さまはこんなことは決してなさいません。人々とお狐さまを引き離そうとする姑息なたくらみでこ

ございます。お狐さまを敬わないのは役人たちの思う壺です。この狐潭の祠も早く立派なものに戻さねばならないのでございます」

楊爺は力む。要するに言いたいのはこのことだったらしい。

叔父はからりと竿を置く。

「我が家運の衰えは決してお狐さまを祀らぬからではない。我が韋家に先祖に及ぶ者がおらぬからだ。現在においては、他でもないこのわしが能なしだからだ。そなたを始めとして、ここに住まう者たちが汗にまみれて働いてくれているのに、莊園が衰える一方であるのは、このわしが非力だからだ。そなたたちに申し訳ない」

叔父は楊爺に頭を下げる。

楊爺は両手を左右に大きく振り、

「旦那さまにそのようにしていただきましては、滅相ありません。そんなつもりで、話をしたのではないのでございます」

岩より下がって地にへばりつく。

叔父は顔を上げる。

「思えば、言い訳のようではあるが、この能なしのわしが一族の主となったのは、あるいは世のいかんともし難い趨勢によるものかも知れない。ここばかりでなく、上から下に至るまで、所に人を得ぬのがいまであるようだ。お狐さまも世の趨勢とともにお力を失った。お祀りするのは良いことではあっても、それによって昔の繁栄がいまさら戻るものではあるまい」

決して偉ぶった態度をせず、言葉飾つたりもしない叔父の横顔を見て、この叔父のためには貢奉に受かっておきたかつたとの思いがよみがえる。

この叔父を「能なし」と薛未亡人も韋莊の妻も小馬鹿にする。いま叔父が自分で「能なし」と言ったのはそのせいだろう。叔父が一族の主になってからの莊園の衰えは著しい。それを叔父の「能なし」のせいと決め付けるのは単純すぎるにしても、無気力にその日その日をだらだらと過ごす使用人に注意させないのを見れば、やはり「能なし」との非難は当たってもいようか。叔父は「汗にまみれて働いていてくれる」と言ったが、本当に良く働く者は

楊爺の他はわずかだ。他の連中は怠惰であるくらいならまだしも、叔父の目を盗み己の懐を肥やすのに精を出す腹黒い知恵者もいる。そんな連中をどうして放置しておくのか、「能なし」の叔父に怒りを覚える点で、薛未亡人も韋莊の妻も同じだ。二人とも、自分に任せてもらえれば、この莊園を変えられるのにとうずうずしている。

叔父が「能なし」と言われて気の毒なのは、叔父が韋莊の代わりに、最も自身に向かない仕事を引き受けていてくれるからだ。薛未亡人や妻には金輪際わからぬだろうが、叔父は決して「能なし」ではない。実は遠く何もかも見越している慧眼の持ち主に違いない。楊爺に謝る叔父の目を見ると、そこには深い知恵が湛えられていると、改めて感じる。

蘭も楊爺に謝る父親の姿に何かしら思うところがあるのだろう、先ほどまでの皮肉な口吻をおさめ、何も言わない。

「この爺は残念でならないのでございます。良い方々ばかりが集まっておられるこの御一家に幸運が恵まれないのが、それでお狐さまをお祀りしてと思

うのでございませう」

「そなたの気持ちは有難い。そうだな、いつしか、余裕ができたならば、お狐さまのお祭をいたそう」

叔父は自身に言い聞かせるようにうなづく。

余裕ができるのはいつか。やはり己が貢挙に合格したときか。この前は、先祖の韋応物の詩を持ち出して貢挙に再度挑めと励ました。それは叔父の本心からの願いなのか。そうではないと思いつつも、「いかんともし難い」のがもしも変えられるのなら、貢挙であろう。韋荘が合格すれば間違いなく家運は一転して上向きになる。

叔父は池の方に向き直り釣り糸をまた垂れる。

叔父は将来を遠望して「いかんともし難い」と言っているのかも知れない。

世の趨勢は、小さくは韋荘の一族を、大きくは唐王朝を衰えさせているようだ。狐が力を失ったように、皇帝も力を失った。貢挙に受かつて唐朝の官僚となれても、もしかするとそれが韋家の先々を保證するものとはならないの

かも知れない。

そのようには言えても、人は遠い先の見通しによって生きるのではない。当面のところをどう凌ぐか汲々と日々を送る。それができねばいくら遠望できても、能なしの誇りは避けようがない。

貢挙に落ちた己も能なしだ。一度の落第で熱を出して寝込むとは、恥ずかしいばかりの能なしだ。妻に罵倒されて当然だ。先祖の詩を持ち出しての叔父の励ましは重々肝に銘じるべきだ。叔父のためにも、一族のためにも、そして己の名誉のためにも、貢挙の合格を目指すべきだ。それが己のあるべき姿だ。

そう思って、すぐにあわてて先ほどの考えに戻る。そのあるべき己は過去のものだ。これまでは狐に騙されていたのだ。

韋蘭とともに旅に出る。どこか遠くの場所で本当の己の生き方を探す。

空はきれいに晴れ上がっている。陽射しは夏の強い輝きを得たが、地上にまだ残る湿り気によって、岩の上の心地良さは保たれている。

韋莊は叔父の隣でまた糸を垂れようとし、身の内に生じた衝動で、不意に唇をすぼめて短く嘯く。韋蘭が叔父の向こうでこちらに顔を向ける。この従弟はきつとわかってくれる。

韋莊は立ち上がる。衣服を振るって中に風を入れる。冠を取り、腕を前後させ髪をばざばさに乱してそこにも風を入れる。

大きく息を吸い、声高く詩を吟じる。

結髪屢辭秩 役人を辞めてのざんばら髪

立身本疏慢 立身出世などどうでもなれ。

大きな声は久しぶりだ。喉の奥がつかえてうまく出ない。

息を継ぎ、もう一度声を出すと、少しばかり喉の通りが良くなる。己の声が水面の上を広がっていく感覚を得る。弟の藹ほどではないにしても、韋莊も声の良さではいささか自信がある。都では俗な歌を覚え、妓女たちをうならせもした。

叔父が驚いたように韋莊を見上げる。叔父も良く知る先祖の韋応物の詩だ。

滁州（じょしゅう）知事を辞め、一時期、官職に就かず貧乏暮らしに甘んじていたころのものだ。

叔父は思案顔になる。

逐兎上坡岡 岡の上で兎を追いかけ

捕魚縁赤澗 川の縁で魚を捕らえる。

高歌意气在 高らかに我が意気を歌えば

貰酒貧居慣 酒を人にもらう貧乏にも慣れた。

声とともに韋応物の心が己の内に甦ってくる。韋応物とて順風満帆な官界人生を送ったのではない。我等が偉大な先祖にもその時代ならではの生きる苦しみがあった。

これで叔父はわかってくれるだろう。

韋荘は声をおさめると衣服を整え、冠を被り、岩に膝をつく。

「叔父上にたつてのお願いがございます」

韋韜は甥の顔を見て、ゆっくりと視線を池に移し、

「兔を追い、魚を捕えたいと言うのか」

「その通りにございます」

叔父はわかってくれている。

韋韜は池に向き直り、竿の先をちよんとはね、動いた釣り糸の先から広がった小さな波紋を見つめる。

朝からまだ一匹も釣れていない。

叔父はからりと竿を置く。

「わしはそなたの父にも、そなたにも詫びねばならない」

韋莊に体を向ける。

「わしは兄を苦しめ、そなたも苦しめた。もしもわしが貢奉を目指していたならば、兄はあれほどつらい人生を送らず、早世もせずすんだであろう。すまないことだ」

叔父は頭を下げる。

この叔父には十分にその才があると思われていた。俗世間との交渉を嫌い、

貢挙の勉強に背を向け、才能の劣る韋莊の父が懸命に貢挙に挑もうとした。

二人はしばし沈黙し、韋蘭が口をはさむ。

「親爺どのがここで謝ることはありませんな。まともな人間なら、お上から秩禄をもらうより、貧乏人同士、酒をもらい合った方がよろしいに決まっております。秩禄など所詮は牛の小便を呑むようなものでしょうな」

「おまえは自分の好き勝手ができているのだ。人のことを言うな」

叔父は息子に厳しく言う。

「いいえ、蘭くんの言う通りです。叔父上は誰に対しても謝る必要などはありません。それよりも、私の願いをいま一つお聞き届け下さい。どうか、蘭くんを私にお貸しくださり、旅に出させていただきとうございます」

「俺をですか」

蘭が舌を鳴らす。

「こんな息子が信用できませんよ」

「蘭くんであればなりません。旅に出て、蘭くんにたくさんのことを教わ

りたいと思っております」

「俺に、何をですか。人に牛の小便を吞ませる術は、あいにくとまだ教えられないほどまくなっておりませんな」

「生きるための術、全般です」

「生きる術ですか。それは楊爺に教わった方が良いでしょう。俺は、兄貴を生かしておくための世話をいちいち面倒みてさしあげるほど親切ではありませんし、丁寧に教える辛抱強さもありませんな」

「それは自分で何とかする」

「それに、俺のこの減らず口を四六時中聞いて、兄貴は我慢できますかな」
「いまでも普通に聞いていられる」

「旅の途中で危ない目に遭えば、鈍臭い兄貴など置いて、俺はさっさと一人で逃げてしまいますが、それでも恨みませんか」

「もちろん構わない」

「そこまで言うのなら、俺から断る理由はありません。兄貴のいきたいと

ころ、どこへでもついていきましたよかな」

「ぜひ頼む」

楊爺は思わぬ話の展開にきよんとしていたのだが、自分の名が出たところから身を乗り出し、

「もしお坊ちやまが旅にお出になるのなら、この爺がお供させていただきます。どんなことでも御命じください。そうすれば蘭のお坊ちやまの御面倒も減りましょう」

「そう言ってくれるのは有難いが、今回は蘭くんと二人だけでいこうと思っている。私も旅の苦労くらいをした方がきつと良いのだ。おまえにはすまないが、許しておくれ」

「兄貴が希望なら、苦労はいくらでもしていただきますかな」

「こんな息子と良い旅ができますか。下手をすれば命も危うい。それで構わぬと申されるのなら、好きにされるがよい」

「有難うございます。もしも旅でたとえ死ぬようなことがあっても、それは

それで結構なことだと思っております」

大袈裟な強がりを言うのではない。いまの韋荘は本気でそう思っている。このままここにいるより、旅の途上で死んだ方がどれだけよいかわからない。「それは確かに結構ですな。死とは、それをもって終わりとなること。これほど楽なものはありません。そこからは苦しみが始まりませんからな。しかし、今度の旅はどう言うことになりましたよかな」

蘭はよほど大人だ。

とりあえず旅に出たいと、己はたったいま思いついたばかりだ。どのような旅になるのか見当もつかない。旅のそのまた先は考えない。旅のうちに死ねれば確かにその先はなくなる。

「旅において何があるうとも、全ては自分で背負うだけです」

韋荘は力強く言う。この場で叔父に納得してもらおうためにも、己の気持ちをはっきりさせるためにも、このように言うのがよい。

叔父は微笑む。

「この息子ほど幸運な者はないと常々思っている。そなたがことさらにそれを羨まず、むしろこやつの幸運がそなたにも及ぶと思われるのなら、どうぞ連れていかれよ」

「蘭くんと私は従兄弟同士とは言え、自ずと違うのは承知しております。私には私の本分がありましょう」

「よろしかろう」

韋荘は深く頭を下げ、

「はなはだ無心ながら、さらにもう一つだけお願いがございます。旅に出るための路銀をお貸しいただきとうございます」

叔父は笑う。

「この莊園にあるものは本来全てがそなたのものだ。わしはそなたの父より仮に預かっているだけだ。希望するままにお使いなさい。范（ほん）に命じてまた何か売らせよう」

事は決まった。

虢州に帰って初めて晴れ晴れとした気分になる。霧は完全に消え、真夏の空は濃い青色だ。太陽が強烈な光を地上に注ぎ、韋荘の顔も明るく輝く。

韋蘭が口を曲げる。

「親爺どの、ちよつと待っていただけませんか。范に売らせるよりも、俺が洛陽あたりにいって売って参りましょう。少なくとも三倍、たぶん五倍くらいにはなるでしょうな」

范とは叔父が頼りにしている韋家の執事だ。

范の家族は代々韋家に仕え、いまの范執事は、先に死んだ叔父の韋韞の片腕として使われていた。韋韞が洛陽の妾宅で不可解な死に方をし、金の出入りに不審な点が多かったことから、韋韞に代替わりした際に、范執事もその任を解かれた。代わって、韋荘の父の時代に執事をしてきた范老人が元に戻った。范執事の伯父だ。ところが、その范老人が長安の商人から借りた金が大きなもめごとの種となり、韋家は虢州以外の土地を失った。范老人はそれを苦に首を吊り、范執事がまた元に戻った。范執事は汚名返上とばかりに、

ごく真面目に働き、韋韜は金のことはこれに任せておけば安心と考えるようになった。そうなるに范執事は徐々に増長し出して、いまやかなりの隠し財産を持っているとの噂だ。薛未亡人は死んだ夫を恨み、范執事も毛嫌いし、金銭を巡って二人は良く言い争っている。薛未亡人が感情的な罵声を飛ばすのに対し、范執事はその非難がいかにかに当たらないかを諄々と弁明し、もめごとを嫌う叔父は自ずと范執事の肩を持つ。

「そなたは商人の真似もするのか」

叔父は息子を叱責するように言う。

「商人どころか、俺は、都の酒旗の下で、身持ちの悪い受験生から、脂粉の香りがふんぷんする手巾をもらう乞食にだってなりますな」

「しょうもない奴だ。好きにするがよい。そなたのためではない、莊くんのためだ、どれでも自由に売り、旅に必要なだけの金を整えるがよい」

叔父は息子にも甘い。

ここを離れて遠くにいけると決まり、喜びが湧く。己の体に力がみなぎっ

てくるようだ。この気分の高揚は、貢奉に失敗してから初めてだ。いや、生まれてからだって初めてかも知れない。

池がまるで違って見える。美しくも、天地間の生気がこの小さな水域に漲っているようだ。

「どうやら、今日はここでは釣れぬな。舟に乗って、場所を替えてみるか」
叔父の発案で、四人は小舟に移り、釣魚棚から離れる。

かくて半日の閑を池の上で過ごし、その日、韋荘は楊爺の小屋に入る。

そのままひと月ほど、池の畔から離れず、旅に出るまでの間、一族の誰とも会わずに過ごす。

韋蘭は書画を驢馬に載せて洛陽にいき、たくさんの銀の粒と立派な馬を二頭連れ帰る。

夏もこれで終わると言う日の夜明け前、屋敷で叔父への挨拶をすませた韋

莊は、石段より広場へ下る。まだ誰もいない。韋蘭は西の厩舎へ、韋莊は東の我が家へ向かう。

先に着いていた楊爺が門を叩く。我が家はかれこれ二ヶ月ぶりだ。

しばらくして、小間使いの老女が目を擦りながら出てくる。

「こんな朝早く、誰かと思いましたが、まあ、どうした風の吹き回しでございましょう」

老女はぞんざいな態度で腰をちよつと屈め、薄笑いを浮かべる。

韋莊は、

「あれは起きているか。起きているのならここに呼べ」

普段になくぶつきら棒に言う。

老女は笑いを消し、韋莊の足元から頭の上の被りものまで、じろじろと吟味する。

「どこかへお出かけでございますか」

「寝ているのならそれで構わぬ。あれに言うのだ。短くて三カ月、長ければ

半年は帰ってこないとな。あれもさぞせいせいすることだろう」

すぐに立ち去ろうとすると、奥から甲高い声が響き、

「どこへ、いらっしやるのですか」

腫れぼったい顔をした妻が出てくる。

「旅だ」

妻は、老女の何倍も不躰な目付きで、韋荘の姿を吟味する。

「都の女のところへですか」

「違う」

怒ったように答える。

「およろしいこと。家には一日もおらずに、また旅ですか」

「ああ、その通りだ」

「でしたら、もうお戻りにならず、いっそ、一生、旅にいらしてくださいませ」

「おまえが望むなら、そうさせてもらおう」

「哀れな妻を捨ていかれるのですね。殿方はいい気なもの。女はここにいますよ。よりないのです。どうしてこの私ばかりが酷い目に遭わないとならないのでしょうか」

いつもの言い草だ。このまましゃべらせては泣くかも知れない。話をすぐに切り、

「では、いくぞ」

くるりと背を向ける。

「さっさと戻っておしまい」

妻は足を踏み鳴らす。

背後の音に耳を鎖し、大股で木々の間を歩く。

広場に二つの人影がある。韋莠と韋藹だ。見送りは二人の弟だけで十分だ。

二人は薄ぼんやりとした顔をしている。寝惚けているのではない。二人は普段から、知らない人の目には相当程度に魯鈍と映るようだ。

「勝手な兄ですまん」

韋莊はまず詫びる。

二人の弟は顔を見合わせ、首をかしげる。どちらかと言うと、まだしも話のできる上の莠が、

「兄上の好きになさってください」

「有難う」

韋莊は、この二人の弟の存在を心から有難いと感じる。熱を出して寝込んだときに、弟がそばにいてくれてどれだけ助かったかわからない。楊爺の小屋にいた間も、二人は毎日のように訪ねてきてくれた。この二人のためになら何でもしてやりたいと思うが、さしずめしてやれそうなることはない。己は自分のために旅に出てしまう。

「どこをどう歩くとも知れぬ旅だ。もしも来年の正月になっても帰ってこなかったならば、莠は妻を迎え入れるがよい。全ては叔父上にお頼みした。藹は莠の妻が叔父上や叔母上に良く受け入れられるよう気を配ってやってくれ。おまえたちは、何事も穏やかにして暮らすのだ。頼んだぞ。わかってくれた

かい」

二人の弟はうなずく。

先に厩舎にまわっていた楊爺が韋蘭とともに、馬を曳いてくる。

「ここで別れよう」

韋莊は馬に跨る。

二人の弟は泣きそうだ。兄がどのような気持ちで旅に出るのか、どの程度わかってくれているのだろうか。

手綱を取ると、

「爺が参らぬとも、よろしいのでございましょうか」

楊爺が悲しそうに言う。

「今回は蘭くんがいる」

「もちろん爺ほど親身にはなれませんが、兄貴一人くらいなら、たぶん死なせずに連れて帰ってこられましょう」

「この前は、危ない目に遭ったら、さっさと捨てて逃げると言ったではない

か」

「楊爺の手前、ここでは助けると言っておきませんとな」

二人は笑うが、

「くれぐれも頼みませぬぞ」

楊爺はごくごく真面目に蘭に重ねて頼む。韋莊の方は二人の弟を楊爺に頼む。

馬首を南に向ければ、もう振り返らない。

荷はわずかだ。馬の皮の袋が二つに瓢箪が二つ。皮袋の中身は、雨の日に被る油衣に二三の衣類と、煮炊きのための小さな道具、それに銀子。瓢箪は酒と水。韋莊は筆記のための道具を、蘭は医術のための薬道具をそれに加える。韋莊は道士のなり、蘭は医者 of のなりだ。

家並みの間をぼくりぼくりと進む。早くも起き出してきた人がいて、いぶかしげに二頭の馬を見上げる。

人の視線は気にしない。どうせ旅に出てしまうのだ。妻が言い放ったよう

に、一生このまま旅に暮らすようになれば、ここの人々とはもう会わずにすむ。貢奉に受かってこの連中に良い思いをさせてやろうなどとはもう考えない。

狐潭から流れてくる小さな水路にかかる石橋を渡る。木の根元から小さな影が飛び出す。ばらばらと馬の前に立つ。娘の彩霞と息子の純だ。

彩霞は両足を踏ん張り、ぐいと顎を突き出すように父を見上げる。怒ったような顔だ。妻に似た眼だ。純は馬の前にはきたものも、しよぼんとうなだれている。

韋荘は笑みをつくり、

「父は旅に出る。おまえたちは、母上によくよく孝行するが良い」

娘は口を尖らせる。

「母上には孝行いたします。では、父上にはどうすればよろしいのでしょうか」

韋荘は娘の眼から逃れるように顔を横に向け、

「父のことなど、忘れて構わぬ」

「わかりました」

娘は低い声で答える。

「では、いくぞ」

彩霞は馬の脇によける。息子は下を向いたまま突っ立っている。馬が首を上下に揺すつても、純は動こうとしない。姉がその腕をつかんで引き寄せる。

「邪魔しないの」

娘の一言に韋荘は胸を衝かれる。

息子はよろけながら引かれていき、父には顔を向けない。馬は二人の子の横を歩む。

娘はよくわかっている。この子らは邪魔なのだろう。そう思うのが己の本心らしい。

韋荘はその思いをすぐに振り切ろうとする。どうでもよいことだ。旅が始まったのだ。この荘園のことは考えなくてよい。

韋莊は無言でぼくりぼくりと馬を進める。

桑畑への別れ岐に、白い髪と白い髭をぼうぼうに伸ばした男が大の字に寝そべっている。

「またいつもの伍武ですな」

後ろの蘭が言う。

この伍武がしらふでいるのを見たことがない。ところ構わず、酔いつぶれて寝てしまう。

「こんな者ばかりだ」

伍武は莊園で一番たちの悪い怠け者だ。伍の家も范の家とともに代々韋家に仕えている。呑んだくれのこの伍武が伍家の最長老だ。伍武がこの体たらくでは、伍の家の大方がのそのそ働かないのも仕方ない。伍武は韋莊の祖父と父の二代にわたる命の恩人である。それを種にいつも威張っている。

「ちよいと蹴飛ばしてやりますかな」

蘭が愉快そうに言う。

「役立たずの邪魔者ばかりだ」

道をふさぐ伍武に向かって吐き捨て、我が子ばかりでなく、莊園にいる者全てが邪魔だと感じている己の本心を知る。こんな連中のために貢挙に受かるうと苦労してきたのだ。二度と見たくない。

「無用の者どものために、うちの親爺どのも御苦労なことですな」
韋莊は叔父の顔を思い浮かべる。

「このまま寝かしておこう。無用と言っのなら、旅に出るこの私の方が余程ひどい。叔父上に御苦労をかけている私こそ馬に蹴られてしかるべきだろう」
「まことはそうかも知れません」

二人は笑う。

旅の別れは多くは朝である。

広い官道が東西南北に交わる。柳のひと枝を折り取る。一篇の短い詩に、

銀の小粒をいくつか添える。

韋荘の前に立つ若者は、腕を前に伸ばしつつも、当惑顔である。掌の上に載せられたものをすぐには握ろうとしない。

「町で着るものを買ひ、残った銀で旨いものをたらふく食うが良い」

若者は立派な髭を蓄えている。目元や口のあたりにはまだ少年らしさが残る。十七、八だろう。着ているものに大きな裂け目がある。これから寒い季節に向かう。新しい衣類はどうしたって必要だ。

韋荘の言葉にも、若者は手の上のもを見たまま、

「俺は字を知らない。だから詩などもらっても、お歴々の方々のように返せはしない」

「それは構わない」

「それに」

若者はもう一方の手で、がちやりと腰の剣を鳴らす。衣服は襤褸でも剣は立派だ。

「こんな小粒が手の上に二三ころがるだけでは満足しないと、もしもおいらが言ったら、どうしますか」

若者は顔を上げる。

劉赤虎（りゆう せきこ）と自ら名乗った男。背中に赤い虎の刺青がある。

この者が剣を抜いたらどうなるか。韋荘はわずかに身を引く。短剣くらいは携えているが、抵抗しても無駄だろう。若者の腕は韋荘の腿と同じくらいに太い。蘭ならいくらか剣を使っても、それとて知れたものだ。二人揃ってここで斬られるのは間違いない。どうせ死ぬこともあると思つて出てきた旅だ。こういう形も悪くはないか。それでも、始めてまだ一ヶ月余で終えるのは少々残念だ。

劉赤虎はにやりと笑う。

韋蘭は柳の木の下で二頭の馬の手綱を握り、にこにこ眺めている。

「あんた方を斬るくらいは訳もないさ。だがな、おいらはお歴々の方々と違い、卑劣な真似はしない。恩を仇で返すのは、おいらのすることでない」

若者は銀を握り、軽く頭を下げる。

「これからどうするつもりですか」

蘭が尋ねる。

今しがたこの辻にきたときに、若者が急に「おいらは西に行く」と言い出して、ここでの別れとなった。

「途中にうまくひっかかるところがなければ、蜀までいくさ。あつちでは、蕃族どもがいつも騒ぎを起こしている。おいらのような兵士をほしがっているはずだ。腕前を見せてやれるだろう」

「腕自慢もよいが、せいぜい命を大切にするのですな」

「せつかくあんた方が救ってくれたのだ、おいらがそれを粗末にしたら、気を悪くするだろう」

「まあ、少しはそう言うことすな」

数日前、韋蘭がこの若者を救った。墓地の近くを通りかかると、かすかな呻き声が聞こえた。男が倒れていた。からだが焼けるように熱かった。背中

の赤い虎の刺青を真つ二つにして刀の傷が走り、ひどく腫れ上がっていた。すぐに蘭が膿を絞り出し、薬を塗り、布で縛り上げた。その手際はみごとなかった。「七三で助からんな」と蘭は言ったが、若者の頑健さが勝ったのだろう、二日目に熱が下がり、昨日から起きて動けるようになった。今朝はもう一人で歩いている。

「だがな、こんなおいらは、どうせ虫けらのように殺されてしまうのさ。あんた方のおかげで、命拾いして、少しばかり寿命を延ばしてもらったが、どの道、長く生きられっこない」

若者は言葉の途中で咳き込み、痰を吐く。身をよじって唸る。

「こんなことでも背中が痛みやがる」

「まだ無理ではないですか」

「おいらへの親切は十分過ぎる。あとは一人にしてくれ。こんなにもらって何の礼もできないが、その代わりに、どうしておいらがこんなさまになったのか、恥を聞かせてやろう。聞く気があるかい」

「詩の返礼として、聞かせていただきましょう」

劉赤虎はまだ立ち続けるのは辛いらしく、地べたにしゃがんで話し出す。

東の徐州（じょしゅう）から逃げてきた。徐州兵士と言えば勇猛さで知られ、若者は腕自慢の一人だった。

徐州は治めるのが難しい土地柄で、中央の人々はそこに派遣されるのを嫌う。徐州の長は朝廷から任命される節度使が勤める。節度使とは、民事と軍事の両面の全権を皇帝から委ねられた地方官である。元来は国境に近い地域に限って派遣されてきた職種であるが、唐も隆盛期を過ぎて統治機構が弛緩してくると、それを補うべく強力な権限を有する節度使が内地にも派遣されるようになった。

節度使は軍を指揮し、節度使の強い権限はその軍によって支えられる。節度使は己のために軍を強化し、軍が強大化すると自律機能を持ち始め、節度使は逆に軍の意向を汲み取らないと何もできないようになる。軍と節度使が対立した場合に、軍が強すぎると、節度使が負けて追い出されてしまうこと

もある。あるいは節度使が死ぬと、兵士たちは自分たちの中から勝手に後任を選んで、朝廷に認めさせたりもする。節度使は自分の部下であるはずの兵士を脅威と感じる。

徐州ではかつてある節度使が身を守るために、勇悍な兵士からなる銀刀、彫旗、門槍、挟馬など七軍を編成し、周辺の警備をさせた。その節度使はそれでよかったのだが、七軍は軍の中で特別な存在となり、新しい節度使がくると、無理難題を呑み込ませ、やりたい放題となった。劉赤虎はその七軍の兵士だった。

「こんどくる節度使はかなり手強そうだから、初めが肝心、どういう目に遭わせてやろうかと、おいらたちは手ぐすね引いて待っていた。何しろ、あの有名な王式（おう しき）がくるのだとき。朝廷も考えたものだ。おいらたちは意気盛んだった」

王式の名は天下に轟いている。王式はこの六月に大きな反乱を鎮めたばかりである。王式が徐州節度使に任命されたという話は、韋莊が旅に出てすぐ

のころに、宿場で聞いた。

反乱とは、裘甫ききゅう ほほと云う者が、都から遠く離れた田舎で起こしたものだ。ちつぽけな火が、見る見る大きくなり、朝廷は対応にかなり悩まされた。南蛮征伐で実績のある王式を投入して、ようやく鎮圧に成功した。

「王式がきて三日の間は何事もなかった。おいらたちも様子見で、おとなしくしていたさ。四日目だ、王式は酒宴を催した。御機嫌取りだなと思った。指定された場所にいくと、高々と幕が張られ、中にずらりと膳が並べられていた。王式の奴、よほどおいらたちが怖いのだなと思った。席についたのはざつと千人くらいだったろう。王式は、急の使者が朝廷からきたとかで遅れるので、先に宴を始めてよいと言ってきて、まず都からの特上の酒があげられた。実に旨かったさ。王式の奴、なかなか憎いことしてくれると、おいらたちが話をしていると、料理もどんどん運ばれてきた。肉がふんだんに盛られていた。王式は依然としてこなかつたが、酒と料理があれば、王式なんかいらないと、おいらたちは大いに呑み大いに食った。そのうち腹が膨れ酔い

が回り、ごろごろと寝てしまうようになった。どんと太鼓が鳴った。何の合図だ、いよいよ王式がくるか、それとも宴の終わりかと思ううちに、ひゅうと嫌な音が走った。たちまち矢が上から雨のように降ってきた。幕の外にずらりと高い櫓が並び、そこから矢がくる、矢がくる。おいらたちはたちまち餌食さ。それからどうなったのか、おいらは覚えていない。死に物狂いだっただ。いい塩梅においらには矢は当たらなかったが、逃げ傷を負ってこのざまさ。何がなんだがわからないままに徐州を出て、いったい何日間さまよったのか、あの墓地でぱったりと倒れてしまった」

劉赤虎はにっと笑い、

「これが、おいらたちが、お歴々の方々にどんな扱いをしていただけなのか、楽しい話ってわけさ。お偉いさんにとつては、おいらたち兵士など、どうせ、使って死んでおしまいってことなのさ」

蘭は、ひゅうと口を鳴らし、

「これで王式はますます偉くなりましたよな」

「その通りさ。そうやってお歴々の方々は上に昇っていき、おいらたちは死んでいく。しかし、そんな卑劣なお歴々の方々にでも、使ってもらわなければおいらたちは生きていけない兵士だってことさ」

「盗賊になってお上に反逆したらいかがですか」

若者はにやりと笑う。

「その方がいいに決まっているさ。だから、おいらも、さつき途中でどこかうまくひっかかるところがなければ、蜀までいくと言っただろう。王式に殺されちまったが、裘甫のような野郎がまた出てくれば、おいらは喜んでいくぜ」

「大方は裘甫のように敗れるとしてもですか」

「構わん。卑怯なお歴々の方々のために戦うよりは、己の意地に賭けて死んだ方がずっとよい。あんた方も詩など書くところを見ると、そのうち朝廷に居並ぶお偉いさんになろうなどと思っっているのだろう」

韋荘は首を振って否定する。

「おいらを怖がらなくてよいさ。だけど、おいらのような虫けら兵士にも血は通っているし、恩義は忘れないと言うことは覚えておいてほしい。ここであんた方を殺し、あの馬に積んである銀を盗るのは簡単だ。今日はおいらはしない。おいらは、これからは二度と背中逃げ傷を負うような恥さらしな真似はしないよう、それだけを心がけて生きていくつもりだ。じゃあな」

劉赤虎は不意に立ち上がり、くるりと身を翻して西に歩き出す。

韋荘も蘭も無言で見送る。後ろ姿はよろよろとしておぼつかない。

声が届かぬ距離までいってしまふと、韋荘は、

「あれで大丈夫なのだろうか」

「歩くうちに元からだに戻っていくでしょうな。兄貴だって、旅に出てから随分と偉丈夫になったでしょう。旅は人を鍛えるものです」

「得意の皮肉に聞こえるぞ。私は相変わらずひ弱だ。あの逞しい体は羨ましいばかりだ」

長安での子ども時代に、李兄弟に置いていかれてしまったところからすでに

韋莊はなよなよとしていて、あの劉赤虎のようにには決してなれない。

「兄貴もまあまあまじな体になってきましたかな。旅はこれからです。もつと立派になりましょう。しかし、問題は性根の方ですな。あの若者が剣を鳴らしたとき、兄貴は怯えておりましたな。あれは卑怯な真似をする男ではありません。そのあたりのことも、見抜ける眼力を持ち、肝を据えませんと」
「どうでも好きに言ってくれ。私はどうせ胆力のない情けない男だ。そなたなしでは一日もたないだろう」

それは事実だ。旅に出て、蘭に全てを教わった。韋莊は火をおこすことすらできない。家では勉強だけしていて誰かがやってくれたこと、長安でなら楊爺がやってくれたことを、旅では自分でやらないとならない。虢州を出てしばらくするまでは、とにかく日々の生活に慣れるのが大変だった。己が食って寝るただけでなく、馬が食って寝るための仕事もある。旅の三日目の晩に、早くも煩わしさに辟易し、楊爺の小屋で寝ている夢を見た。起きたら楊爺が何でも整えておいてくれ、嬉しいと思ったら目が覚めた。一から自分

でやるのかと思うと、気が萎えたが、楊爺のいる虢州の莊園には戻れないし戻りたくない。面倒なことにも少しづつ慣れるしかないと、心を決め、同じことを蘭に手取り足取り何度も習って、どうにかこうにか覚えていった。次第に日々がいつもの繰り返しとなり、虢州からも遠ざかるにつれて、少しずつ旅の解放感を味わえるようになった。

一日馬上にいれば、秋の陽射しでも顔は焼け、虢州の小屋に籠っていたころとは見違えるばかりの精悍な顔つきとなった。それでも、蘭の言う通り、性根の方にまでは特段の変化はない。

「たとえ胆力があっても、あのような若者が思い切り生きるには、盜賊の仲間に入るしかないとは惜しいことですね」

「いつ死ぬとも知れぬ危うい人生しかあの男には許されないのかい」

「その点を言えば、誰でも同じですね。生きるとは死ぬためなのですから」
「短絡的にそう断じるのならば、あの若者をあのまま墓場で死なせてやってもよかったのではないのかい。これから兵士になるか、盜賊になるか、どち

らにしても修羅場にまた出るだけだ。命を救ったのは余計だったのではないのか」

「それは否定しませんな。誰でも修羅場を生きるのが、少しばかり長いか、少しばかり短いかの違いがあるだけですな。所詮そのようなものだとわかってしまえば、生きてても悪いことはありませんでしょうな」

「そなたが言うのはどうもわからん」

「訳が良くわかるようなことを言つては、俺らしくありません。そうは思いませんかな」

「では、訳のわかることを言わねば私らしくないと出てみるか」

「さすが、二十年余りの勉学を続けてこられた兄貴ですな」

「茶化すでない」

「学問とは貢挙に受かるための手段と思っておりますが、知恵を付ける効果も幾分かはあるのですな」

「貢挙の話はやめてくれ」

「さりながら、兄貴も訳のわからないことをしましたな」

「何だ」

「劉赤虎に詩を渡しましたな。銀はよくても、読めもしない詩には、妙な顔をしていたではありませんか」

「別れ際には詩を贈るものだ。それに、あれはあの若者のために書いたのではない。私自身のためと思って書いた。もう二度と会わぬと思えば、いささかの感慨なきにしもあらずだ」

それは旅に出てから初めての詩だった。

韋荘は詩を得意としてきた。詩は貢挙の試験科目であり、人との交わりに欠かせぬ道具でもある。官界に出るにも、官界において良い縁故を作るにも、詩が書けなくてはならない。韋荘は詩は大いに得意として、自信を持っていった。しかし、貢挙に落ちてからは詩を作ろうという意欲が薄れた。長安を出る日に劉得仁の墓に手向けた一首があつたくらいだ。

あの若者との別れに際し、胸に湧き上がってきた思いをなぜか詩を書きと

めておきたくなかった。意外にもすらすらと詩句が浮かび、すぐにまとまった。若者が字を知らないのがよかったのかも知れない。若者がどう受けとめるかなど意識せずに書けた。

「何事も己のためと、割り切れるようなれば、兄貴も結構ですな」

「もともと、人のために何かしようと考える立派な人間では、私はない」

「そう言いながら、兄貴の頭には、実は、仁と義とか、御立派なことが深く染み込んでおりましような。そればかり学ばれましたからな」

「それは悪いことか」

「いやいや、大変結構でありますな」

「そなたも医術を学び、あの若者を救った。それこそ余程人のためになる術ではないのかい」

「医術がですか。これこそ俺のためですな。俺が長生きをするための術です。

あの男を救ったのも、腕を磨くよい機会だったからですな」

「おかしなことを言う奴だ」

「それに人を助けておけばいずれは俺のところに戻ってきましょう。先ほど、あの男に斬られずにすんだのは、俺が先に治療してやったからですからな」

「いやいや、先に救っていなければ、そもそも斬られるような場面もあるまい」

「ならば、そのうち何かしら恩返ししてくれましょう」

「あの男とまた会うのか」

「どうですか。俺は不思議とそう言う直観は働くのですが、劉赤虎は良くわかりませんな」

「訳がわからん」

「いずれにしても、全ては俺自身のためにやっているってことですな」

「ならば私とこうして旅をしているのも、そなた自身のためなのか」

「もちろん、もちろん。兄貴がいればこそ、この馬に乗って楽に旅ができません。俺一人では、親父どのからあれだけの金を引き出せません」

「馬を買うために私を使ったのか」

「そうそう。やっとわかりましたか。相変わらず兄貴は鈍いですな」

蘭と韋莊は声を合わせて笑う。

若者の姿はすでに見えない。官道の人車の往来は、長安洛陽間に比べるとまばらで、道に出会う人々の服装も粗末である。

二人は馬にまたがり南へと進む。今日の旅の道のりは始まったばかりである。

「また詩ですか。好きですな。いつでしたか、劉赤虎に別れの詩を贈って以来、毎日のように詩を作っておられますな。そこまで好きだったとは知りませんでした」

韋蘭が笑い声を立てる。韋莊は気にもとめず、詩句を捻りまわす。もうひと息だ。どこかがすりりとした姿を得れば、自然と全体が整う。

思い切って出てきた旅だ。二度とこのような旅はできまい。詩に書き留め

ておかないのはもったいない。詩を作り出してから、旅の風物に刺激されて心の内に湧き上がる感慨も変わってきたような気がする。もしかしたら己自身が少しずつ変わってきているのかも知れない。本来の己を得ようとの旅で、己の思いはまだ漠然とし、しかも技が未熟で、詩に肝心なことが刻み込めないもどかしさがある。それでも、旅を続け、日々の鍛錬を積むうちに、いろいろなことが変わっていくだろう。

「そなたもぼんやり景色を眺めているだけでなく、詩でも作ってみてはどうだい。毎日毎日、違うところへいく日々だ。いまの思いはいま書き留めておかないと、明日になったらすっかり消えてしまうだろう。惜しいとは思わぬか」

蘭は、韋荘の背中から少し離れたところにいる。

「消えてくれて結構。消えてくれない文字を、俺は、たちまち消えていつてくれる音ほどには、信用していませんからな」

蘭は笛を取り出す。

街から離れた平原の真っ只中、小高い盛り上がりには点々と巨石が並ぶ。巨石は元来は整った方形をしていたのだろう。いまでは満足な角や辺がない。表面に大小たくさん窪みができた岩に二人は別々に座っている。

徐州兵士の劉赤虎と別れてから南へ南へときた。ここは楚の靈王(れいおう)が築いた章華台(しょうかだい)の遺跡だと言われる。秋の日が西の空に低くなり、この高台ばかりに明るさが残る。

靈王は即位から七年目(紀元前五三五年)、壮麗な章華台を建てた。それは周の時代。各地に諸侯が分立し、建前上は周の王室に仕えつつも、領土を巡る果てしない争いを繰り返していた。靈王の時代に楚の国力は充実し、それを誇示すべく章華台を築いた。諸侯を招いて盛大な落成式を行った。そのわずか六年後、靈王は宮殿を追われ自害した。

空はあくまでも澄み、一点の陰りもない青色に向かって、韋蘭の笛の音が昇り始める。

秋は一日一日と日が短くなり、旅は気ぜわしくなってきた。遠くに幾

条かの人煙が昇り、彼方の林へ鳥の群れが帰っていく。

「ほほできたようだ」

韋荘の胸の内では対句が形を成す。これを前後二句ずつで挟めば七言律詩が完成する。

笛の音が止む。

「聞かせていただきましょうかな」

「こんな感じだ」

韋荘は咳払いをする。

孤燈聞楚角　ただ一つの灯のもと、楚の国の角笛を聞くうちに

残月下章台　章華台へと月が傾く。

芳草已云暮　芳しき草はすでに枯れたのに

故人殊未来　かの人たちはいつまでもこようとしない。

韋荘の声が、二人の他には物音を立てるものもない遺跡の隅々へと伝わっていく。

韋蘭はひゆうと唇と鳴らし、岩の上にごろりと寝そべる。

「気に入らないのかい」

「そんなことはありませんが、見渡したところ、まだ灯はどこにもともらず、九月の終わりの今日、明け方にならねば東に昇らぬ月を、いつ西空に下る残月として御覧になったのでしょうか。それに、俺が吹くのは、残念ながら楚の国の角笛でありませんな」

「詩は眼前の景をそのまま詠めば足るものではあるまい」

「もちろんおっしゃる通りですな。実景から離れるも可。ならば、靈王の鬼にでもお出ましただき、ここらで暴れてもらったらいかがですかな」

「奇を衒つても仕方あるまい」

「節度を保った空想は、今朝はどこぞの宿を発ち、何里を歩き、どこそで何を食ったと、事実をそのまま叙述するのに比べて、より面白いものですか。兄貴としては、楚角を持ち出し、残月を傾けさせ、それでよい工夫だと思っておられるかも知れませんが、つまらん小細工はかえって平凡に墮する

というものでありませんかな」

「相変わらず辛辣だな」

「ついでに言えばですな、そもそも詩とはいかなるものか。文字という、まこと粗雑な網で掬い上げた滓のようなものではありませんかな。微小で繊細で大切なものは、網目を通り抜けてどこかへといってしまうですな。滓を後生大事に取り上げて、よい詩ができたなどと思うのは、作った本人だけでありましょう」

「詩は無益と言うのか」

「いえいえ、この結構な御代に、ひとかどの人物であると人さまから認めていただくには、詩が上手に捻れませんか。詩には大いに益があること、俺にも異論ありません。何しろ、詩が書けねば貢奉は落策、お偉いさんとの交際はできず、宴席で妓女の気を惹くことさえ適わぬ。誰も彼も詩がうまくなりたいと望むのは当然ですな。自身の詩を一篇も残さなかつた孔子さまなどは、いまの世に生まれ合わせたなら、さぞ肩身が狭いでしょ。我が一族

は幸い、代々詩の病に深く侵され、韋氏の一員であるからには、立派な詩の一つや二つ、有難くもすぐに作れますな。兄貴もこのところは寝ても起きても詩、まこと結構ですな」

「そういう利益はどうでもよい。いまの私は詩を書かずいられない、それだけだ」

「目の前にあるものがそうさせるのですかな」

「その通りだ」

「そうおっしゃりながら、ありのままを歌わない。どう言うことですかな。」

「いましもここに楚角が聞えましたなら、兄貴はそれをありのままに詠みみすかな」

「どうだろうか」

「いまこの岩の列の形状をそのまま詠もうとしないのと同じに、楚角の音色を詠むのは躊躇するでしょうな」

「ありのままでは面白が足りないと思えば工夫もする」

「それが功を奏するか、生半可な工夫が凡庸の奈落へと落ちていくか、大きな違いですな。兄貴のいまの対句は、褒めてさしあげたくても、どうですか、虢州の窓辺に寝そべっていても書けるではありませんか」

「まるで良いところなしなのかい」

韋荘は苦笑する。ここまで酷評されても腹は立たない。蘭の毒舌は不思議と心地良い。

「付け加えると、寢床で書いたからと言って全てが詰まらないとは限りませんな。兄貴のいまの詩がそれに及ぶかどうか、それは問題ですな」

「そなたならこの章華台をどう詠むのかい」

「そうきますか。詩は我が事にあらずと、言っておきましようかな」

「逃げるのか」

蘭は身を起こす。

「この風光はここにあり、我が思いは心の内にある。風光も思いも文字の上にあるではありませんな。風光は天地の大きさを持ち、心は天地をもその

内におさめる。風光は千変万化、心もまた千変万化。しかし、文字には定まった形があり、限られた意味しか持ちません。それを使って風光や心を表そうとするのがもともと無理なのですな。所詮、凡人の為す詩は、その制約の外には出られず、寥々たる文字の内に風光と心を無理やりおさめて、元も子もなくすのですな」

「凡人でない詩ならどうだい」

「我が親父殿は韋応物の詩をこの上ないものと有り難がっていますな。韋応物として凡人との差はわずかなもの。真に非凡なのは、俺の知るところ、一人くらいでしょうかな」

「その一人とは」

韋荘は後ろを見るが、韋蘭はまた寝そべっていて、無造作に答える。

「杜甫（どほ）でしょうかな」

「あの地味な男がかい」

韋蘭とは詩を巡る問答は幾度かしてきた。杜甫の名を口にするのはこれが

初めてだ。

「その上、偏屈な男ですな」

「杜甫のどの詩が良いのかい」

「そうですね、もしも一つだけ挙げるとすれば、これですか」

蘭はからだを起こし軽く唱える。

皇帝二載秋

皇帝の二年目の秋

閏八月初吉

閏八月の一日。

杜子将北征

私、杜甫は北の旅へのぼり

蒼茫問家室

蒼茫として家の安否を問おうとする。

最初の四句で口を閉じる。全部を唱えたら長くなる。『北征』と題する五言百四十句の詩だ。

「なるほど、それか」

「どうですか。これに優るものはないと、納得しますか」

「重苦しい詩だ」

「しかも貧乏臭いですな」

「せっかく自分で挙げたくせに、けなすのかい」

「いやいや、これは贅辞ですな」

杜甫は韋応物の先輩だ。玄宗皇帝の絶頂期に、官僚になろうとして貢奉に受からず、有力貴族に才能を認めてもらおうとして晦渋な詩は敬遠され、剛直な性格は嫌われた。

玄宗皇帝の治世は安祿山（あんろくさん）の反乱によって暗転した。長安は賊の手に落ち、玄宗皇帝は成都へと逃れた。途中の馬嵬において、兵士に迫られ、楊貴妃を斬った。玄宗は退位し、息子の肅宗（しゅくそう）が靈武において即位した。杜甫は肅宗の新政府に赴こうとして賊に捕まり、長安に連行された。賊の支配する都で困難な日々を送り、機会を得て脱出し、再び肅宗のもとを目指し、今度は無事にたどり着けた。この功績をもって杜甫は初めて官職を授けられた。それより家族のいる町を訪ねに出て、その際に見聞したことを歌ったのがこの『北征』の詩である。

「杜甫のこの詩は立派だと認めよう。では、杜甫に似て、優美な言葉を使わずに、この章華台でのそなたの思いを貧乏臭く歌ったらどうなるのかい」

「詩は我が事ではないと申しました。何か詠まねば許さぬと、兄貴があくまでおっしゃるのなら、兄貴の対句に合った、平凡な結びくらいは、戯れに付けて進ぜましようかな」

蘭は少し思案して、

郷書不可寄

わが故郷へと手紙を送れずにいる

秋雁又南回

雁が南に帰るこの秋に。

韋荘は手を打って笑う。

「まぎれもない平凡な結びだ。雁を使うなど、そなたの言う通り、寢床でも考えられる。うまく結びができたから、始まりはこうか」

清瑟怨遙夜

清らかな瑟の音は長い夜を怨むよう

遶弦風雨哀

まわりつく弦の響きは風雨のような哀しさ。

蘭も手を叩いて喜ぶ。

「瑟に弦。ここにありもしない楽器がこれだけ揃えば楽しい限りですな」

韋荘は急に声を落とす。

「だがな、真面目な話、いくら凡庸な詩でも、心にはそれを生む根がある」
「どんな根ですかな」

「それを言おうとして詩を書くのだ。すらすら答えられるくらいなら、詩などはいらない」

日はすでに落ちてしまい、冷気が次第に岩へと忍び寄ってきている。

蘭は立ち上がり、韋荘の隣へとやってくる。

「兄貴が真面目になったのなら、俺も真面目になりますかな。いまの詩は、本当のところ悪くありませんな。形は整っているし、まあまああの作と言えましょう。こうして旅の空にあつて、古き遺跡を訪ねれば、遠き昔へと思いを馳せるのは、人として普通のこと。ふと現実に戻り、故郷へと思いを巡らせるのもごく普通でしょうな。その普通のことを詩にすれば、多くの人の共感が得られましょう。ですから、大方の旅の詩はそのようなことを歌っており

ますな。そのような詩を読み慣れると、今度は遺跡に立ったときに、やはり
自ずと故郷を思うようになり、『郷書 寄せる可からず』とか詩にして、うま
くいったと喜んでしまう訳ですな。しかし、いまの兄貴はどうですか、家
に手紙を書きたいとか、家からの手紙をほしいとか、さらさら思つてはいま
せんでしょいな」

「いやいや、詩に詠んだ通り、思っているぞ」

韋莊は笑いながら言う。

「本当ですか」

「本当だとも。家からの手紙を心から待っている。そこに、我が一族は死に
絶えましたと記してあるのをな」

「そうなれば、この唐土にもはや係累はなく、兄貴と俺だけの気楽な旅が続
きますな。まことに結構」

「そなたは本当にそう思うのかい」

「兄貴はそう思うのでしょうか」

「ああ、そうだ」

「ならば俺もそう思つて悪くはありませんでしょうな。ただし兄貴のせいぜい四半分くらいですかな」

「なぜ四半分なのか」

「兄貴には妻子がありますが、俺にはない。だから、係累のなくなる喜びは兄貴の半分ですな。兄貴は貢拳に落ちましたが、俺は貢拳を受けていない。だから、ここでも半分」

「四半分でも私の心をわかつてくれれば十分だ」

二人の足元は明るさを失い、四周を取り囲む大地の境から夕暮れが中天へと昇りつつある。

「いや、四半分もわかつておりますか、実際には怪しいですな」

「貢拳に落ちた者の苦しみはそうでない者にはわかるまい。あの劉赤虎の苦しみはあの男にしかわからない。仕方ないことだ」

「それも怪しいですな。当の本人も案外わかつていないではありませんか」

「骨身にしまっているようでいて、実はそうかも知れない」

「兄貴はまだ貢挙に捉われていますな」

「貢挙を言うのはもうやめよう」

「いや、この際、遠慮なく言わせてもらいましようかな。ちよつと考えてみていただけませんか、そもそも貢挙とは何であるかと」

「そなたはこれまでは遠慮していたのかい」

「いくらかは」

「まあよい。貢挙とは何かと問われれば、朝廷に仕えるに相応しい人間を選抜する試験である。当たり前のことだ」

韋莊は生真面目に答える。蘭は奇矯なことを言おうとしているに違いないのだから、それを聞けばよい。

「本気でそう思っているのですかな」

「現実には地位と財産を目当てに受ける者も多い。私もそうだった。貢挙は国のために役立つ人間を選ぶのと同時に、保つべき家柄も選ぶのだろう。我

が一族のように、貢挙に受かる人間を送り出せない家は消えていくしかない」
「兄貴のように二十年以上勉強したところで、受からなければ無に帰すだけ。
選ばれるのは百人に一人か二人。残りは捨てられる訳ですな」

「合格した連中は連日の祝宴攻めだ。落第者はそれを横目に見ながらすごす
ごとと都を去っていく。惨めなものだ」

「そこですな。俺も乞食となつて今年は見せてもらいましたな。それで思っ
たのですが、貢挙とは、朝廷に仕えるに相応しい人間を選抜する制度として
よりも、朝廷を怨望する者を大量に生み出す制度としてより有効に機能して
いるのではありませんかな」

「何を言うのかい」

「兄貴だつて思いはしませんかな。今年の貢挙で受かった連中よりも、己の
方がよほど有能な官人になれたはずだと。どうですかな」

弟の藹がそのように言ったことがあった。蘭とは全く違う考えからではあ
るうが。

「私はともかく、貢拳を志すからには、立派な官人になる自信を持っているはずだ。それだけに、落第すれば悔しい思いも強い」

「実際に合格してしまうと、どうですか。門閥を笠に着た陰険な息子どもや、悪辣きわまりない宦官どもや、横暴なむくつけき將軍たちと、ひるまずに戦っている者がどれだけいますかな。兄貴だって、もしも朝廷に居並ぶようになったら、戦えましたかな」

「私はそなたほどにひねくれていない。正直言つて、権威を前に、ひるむかも知れない」

「兄貴は素直ですから、長いものには巻かれろとなりそうですね」

否定はできない。己の卑小さは旅に出て余計に思い知るようになっていた。もしも貢拳に受かっていたら、己の小ささに気づかぬままに官人になっていたのだろう。そうであれば、力を持った者の前で己を通すのは難しい。

「うっかりすると、兄貴も、あの可哀想な葉京（ようけい）の二の舞ですか」
「泣く泣く故郷に帰ったと言うあの葉京か」

「たった一度の会釈で長年の苦勞も水の泡とは、哀れでしたな」

二年ほど前のことだ。葉京は貢挙に合格した。当然祝宴続きの日々となった。長安の郊外の景勝地での酒宴からの帰り道、合格仲間と馬を連ねて浮かれた気分ですぐ街中へと戻ってくると、たまたま宦官の一行と行き逢った。酔って意気軒昂な合格者たちは、宦官への反感をあからさまに態度に示した。

宦官と貢挙の合格者は昔から仲が悪い。そもそも朝廷の勢力はほぼ二分されてきた。貢挙の合格者たちからなる新興勢力と、旧くからの貴族である。貴族は血筋によって高位高官に昇る。高位高官の子弟には、試験とは無関係に官位が得られる蔭位（いんい）という特典がある。高い家柄はこれによって保たれる。韋荘の家はそうした門閥に比べると弱小で、貢挙の合格者を出さないで先細りしてしまう。貢挙の合格者は、勉強せずに高い地位に上った貴族の子弟に比べると、弁は立つし、文書を作成する能力も高い。儒教の政治理念も身につけているから、何かと保守的な貴族と対立する。貴族と貢挙合格者のどちらが朝廷で優位に立つかは、それは皇帝の意向に左右される。

ここで第二の勢力が浮上する。常に皇帝のそばに仕える宦官である。後宮三千人と言われる多数の女性に囲まれた皇帝の私生活を支えるのは、去勢された男子である宦官だ。宦官は皇帝の最も身近にいつもいるために、皇帝の嗜好が宦官の影響を受けるのは避け難い。幼くして即位した皇帝は、宦官の言いなりと言ってもよい。貴族も貢挙合格者も、宦官をいかにしたら己の側に取り込めるか腐心する。宦官はこの両者のせめぎあいの間に立って力を伸ばす。近衛兵など都にいる兵士の指揮権は宦官が掌握するところとなり、宦官に歯向かった者が、宮中で無残にも殺される事件も起こり、最近では、宮中で最も力があるのは実は宦官と言うことになっている。貴族が宦官と結託すれば、貢挙の合格者たちは勢い宦官と対立する。

そのようなことから、葉京を含む一行は、憎々しげな眼差しを宦官に向け、道に唾を吐いたりした。葉京も顔をしかめて宦官たちを睨みつけていると、たまたま見知った顔がそこにあった。かつて地方の節度使のもとで私的な書記となっていたときに、その宦官と会っていた。

節度使は軍事、民事の両者を握る強い権限を持った地方官で、節度使が皇帝に対して忠誠を守っているか監視するために、中央から宦官が派遣される。宦官はいわば皇帝の私的な奴隷で、皇帝の目の代わりをする。節度使とすれば、宦官が都に帰ってから変な告げ口をされては困るので、宦官がくると接待攻めにして莫大な賄賂を贈る。宦官は賄賂の多寡に応じて、皇帝の前で節度使を褒めたり諂ったりする。宦官にとって、地方に出るのはひと財産を稼ぐまたとない好機である。

葉京がすれ違いざまに見た宦官も、節度使から賄賂をしこたまもらっていた。葉京は、久しぶりに見た顔に懐かしさを覚え、何の気なしに馬上で会釈した。宦官もすぐに、あの良い思いをさせてくれた節度使のもとにいた書記であるのを思い出し、満面の笑みで挨拶を返した。それが他の者に見咎められた。「こいつはあの宦官と知り合いだぞ」と誰かが叫んだ。

それから話到尾ひれがつき、葉京は宦官と結託しているけしからん奴だと、皆にそっぽを向かれ、官職に就く前の実技試験で落とされてしまった。葉京

は失意のまま故郷に帰らねばならなかった。

「葉京は軽率だが、気の毒でもあった」

苦勞して貢挙に合格したのに、ただ一回の会釈で官職を棒に振るとは、葉京も無念であつたろう。落第した韋莊には身につまされるものがある。

「兄貴だつたら、知らん顔ができますかな」

「宦官の悪行を許さぬためには、己にもよほど厳しくしなければなるまい」

「宦官はそれほど悪い連中ですか」

「近年の増長ぶりは目に余る。恐れ多くもお上を門下生とみなすなど、その不遜は言語道断だ」

貢挙の及第者は、そのときの試験の総監督を、己の才能を認めてくれた人として敬い、生涯にわたつて師匠と門下生の関係を結ぶ。一方で、このころ、皇帝の代替りのたびに、幼少の皇族の中から宦官がこれかと思う者を擁立することが続いている。宦官が皇帝を選抜する試験官を気取り、皇帝はその門下生と言う訳である。

「しかしですな、宦官を忌み嫌うお歴々と、当の宦官とは、どれくらい違うものなのでしょうかな」

「無知で強欲な宦官と、儒学を修め貢奉に受かった者と、雲泥の差があるのは言うまでもないだろう」

「多少の知識の差はありましようが、民を困らせ、国家を損なっている点では五十歩百歩ではありませんかな」

「何を言うか。まるで違うぞ」

落ちたとは言え、韋荘も貢奉を受けた男だ。ここは譲れない。

「狐潭で、楊爺が狐の話をしたのを覚えていますかな。狐は昔は民の守り神でしたな。それが、いまでは、お上にたてつく気概のある若者に牛の小便を飲ませる情けない小悪党に成り下がった。楊爺の説ですな。楊爺はそこらの下僕とはひと味違いますな」

「そうだな」

旅に出て楊爺と離れてみると、楊爺が少しばかり違って思えてくる。

「なかなかの人間ですな」

「それと、貢挙とどう言う関係があるのだい」

「まあ、急がず聞いていただきましようかな。あの徐州から逃げてきた劉赤虎は、赴任してきたばかりの節度使に騙し討ちにされたのでしたな。これは狐の悪さどころではありませんな。要するにですな、いまの世では、上に立つ者が下の者を騙す知恵において、狐も逆立ちしたところで適わぬと言うことですな」

「楊爺もそう言っていた。だから、悪い連中は懲らしめねばならない」

「誰が懲らしめるのですかな」

「言うまでもなく、正しい教えを守る者だ」

「正しい教えとは仁とか義とか言うやつですかな」

「むろんだ」

「それを守る者はどこにいるのですかな」

「最初にそなたに尋ねられた問いの答えの通りだ。貢挙によって、全土にい

る有意の士を朝廷に集めているではないか」

「兄貴は残念ながら漏れた訳ですな」

「この際、私のことはどうでも良い」

「それはそれとして、正しい教えを守る者がいるのは兄貴の言う通りとしましようかな。しかしですな、それで世の中が良くなっておりましたようかな。

正しい教えと言いつつ、知識を、狐と民を引き離すこすっからい仕事に使っているではありませんかな。何しろ正しい人々の一番上に立つお方が、宦官の門下生ではどうにもなりませんな」

「宦官どもを排除しなければならない。お上のまわりに正しい者が居並べば、お上は自ずと正道にお戻りになる。稚きときよりお近くに宦官どもしかおらぬ故、お上は正しい道をお聞きになれないのだ」

韋蘭は「ふう」と大きく息を吐き、ゆっくりと立ち上がる。

あたりはすっかり暮れ、人煙は闇に消え、空にぼつりぼつりと星が浮かんでいる。

「正しい道はありましよう。俺もそれを信じたいですな。しかしですな、正しいとされるものが世を変えたためしがありません。変えようとして失敗した例ならいくらでもあります。そもそも孔子でさえ、誰にも使ってもらえなかったではありませんか。孟子も威勢の良い言葉を山ほど吐きました、所詮は負け犬の遠吠えでしたな。儒者で成功したのは、荒くれ者たちに礼儀作法を仕込んで、漢の劉邦を喜ばせた、何とかと言う奴くらいでしたかな。あれはお上の役に立ちましたな」

韋莊はここで儒学を学んだ一人として断固たる弁を開陳すべきかと思ひもするが、それよりは従弟に言いたいことを言わせた方が良いと気づく。

「聖賢を誇りたければ勝手にするがよい。ならば、逆に聞かせてもらおう、何が世を変えたと言うのだ」

韋蘭は両手を挙げ、暗闇に沈んだ遺跡を示し、

「例えば、嫉みですな。ここは靈王の章華台の跡。当時、国勢赫々たる楚が、ここに豪華な章華台を築きさえしなければ、靈王も六年で死ぬような羽目に

陥らずにすんだのではありませんかな。章華台が立派であればあるほど己の權威は高まり、楚の霸權は揺るぎないとは浅はかの極みでしたな。章華台の豪華さに靈王は諸侯のみならず民衆の激しい嫉みを買ひ、身を滅ぼしたのですな。唐の宮殿も章華台と同じでしょうかな」

「そなたは、唐朝も靈王と同じ運命をたどると言うのかい」

「長安には嫉みが渦を巻いておりますな。皇帝がお偉くあらせられて、歴々の面々が威張り散らし、嫉みを呼ばぬはずがありましようかな。事実、延興門外に座す乞食は、淫らな香りの染み込んだ手巾を無造作に放り投げる名族の愚か息子を嫉み、貢奉に落第した者は、酒宴に明け暮れて出世を約束された及第者を嫉み、官人になったものの甘い汁を吸えずにいる不器用な男は、しこたま賄賂をもらってほくほく顔の宦官を嫉みますな。順に上へ上へと嫉んでいきますと、その行き着く先はどこですか。宦官の門下生でしょうかな」

「長安とて永遠の繁栄が続くものではあるまい。何千年かの先には、唐の宮

殿がこの遺跡のようになっていたとしても少しも不思議ではあるまい」

「何千年も先でしようかな。俺の思うところ、兄貴自身がその目で長安の崩壊を見るでしような」

韋蘭の声が不気味に響く。

「そなたは占いもするようになったのかい」

「占うまでもなく明らかではありませんかな」

「そなたは唐が滅びるのを望んでいるのか」

「とんでもない。唐が長く続いた方が、俺にとつて好都合だつてくらいのこととは、さすがの俺でもわかりますな。俺がこんなふうの旅をしていられるのは韋家の一員に生まれたお蔭ですからな。そうでなければ、長安で本物の乞食になるか、徐州から逃げてきた劉赤虎のように兵士になるか盗賊になるか、それとも旅から旅への医者か、いずれにしても、どこかで野垂れ死つてころでしような。俺だけでなく兄貴や我が一族のためには、唐の世がずっと続いてくれた方がよいに決まっていますな。もっともっと望ましいことを言え

ば、兄貴が貢奉に合格してくれて、正しい道などすっかり忘れ、宦官にへいこら腰を屈め、ひたすら一族の利益を追求してもらいたいものですな。それが実際のところ一族の者が願っていることですからな」

「あけすけに言えばそうなのだろう」

韋荘は不快ながらも同意する。

「だが、残念ながら、世の中はそんなことをもう許してはくれませんでしょうな」

「大唐が滅びるからかい」

「すでに滅びは始まっていますな。貢奉は朝廷を怨望する者をたくさん生み出し、全土に溢れ返っておりますな。その嫉みは、白蟻のように唐朝の土台を食い荒らしています。ただそれだけでは世を覆すには至りませんな。青虫連中は不平不満を言い募り、世を腐らせても、乱を起こす力はありませんからな。儒学の経典には、残念ながら、妓女と遊ぶ方法が書かれていないのと同じく、世を乱す知恵も書かれていませんな」

韋蘭は軽く笑って、韋荘の隣にまた座る。

足元は冷え、岩にならまだ昼間の温もりが残り、二人の話は熱を帯びたり冷めたりしている。

「いま言った青虫連中とは何のことだい」

「御存知ではなかったですか。あれは兄貴が一心不乱に受験勉強をしていた一昨年の夏でしたかな、劉晔（りゅう おう）が言い放った言葉ですな」

「劉晔とは誰だい」

「裘甫の参謀ですな」

「逆賊の裘甫のか」

「唐朝には逆賊でも、民衆には、結構な世直しをしてくれる救いの主と見えたはずですよ」

大中十三（八五九）年十二月である。裘甫は百人の仲間とともに象山の役所を襲撃した。裘甫は勝利し、官の倉庫を開いて民衆に財貨を分けた。裘甫は隣の町も襲い、その勢力は瞬く間に三万にも膨れ上がった。

「そう見えたかも知れないが、裘甫には世直しをする才などなく、官軍の前に、当然の如くに敗れ去った」

「官軍を率いたのが王式でしたな。劉赤虎をだまし討ちにした男ですな。皇帝が王式を乱の鎮圧に差し向けようとしたとき、嬉しいことに宦官どもが立派な理由で反対しましたな。金がかかるのでやめましょうと。王式は、ここで討伐しておかないと、何十倍もの損になってはねかえつてくると、皇帝を説得しましたな」

「金勘定だけで決めた訳ではあるまい」

「金勘定の機転がきけばまことに結構。それすらわからぬ深謀遠慮のなさでは、朝廷のお歴々も青虫も同じですな」

「だから青虫とは誰なのだい」

「緑の服を着た儒者ですな。貢挙に落ちて地方に帰った連中は、たいていは儒服を身に付け、村の子弟を集めて文字を教えて日銭を稼ぎましょう。お狐さまなど信じないで、礼だの義だのを身につけなさいと教えますな。お上に

とって好都合な教えですが、そんな連中も、貢奉に合格して官僚になった奴等には激しい嫉みを持っていきますから、裘甫の旗揚げには心躍らせて集まったのですな。裘甫は始めのうちは当たるところ敵なしの勢いで、どんどん人が増えていきましたが、王式が都を出たと聞くとたちまち怯えてしまいましたな。王式は南方の蛮族との実戦経験が豊富でしたからな。裘甫は主だった者を集め善後策を相談すると、軍事参謀の劉晔が、『官軍が到着するまで少なくとも四十日かかる。その間に、豊饒な長江以南の土地を奪ってしまえば、子々孫々までは保証できぬとしても、我ら一代の間は何の心配もあるまい。うまく時を得れば、天下も手にできよう』と言いましたな。まことに勇ましいですな。ここで、高慢な顔で王輅（おうらく）が口をはさみましたな。これが青虫ですな。『劉晔の策は、三国志の孫権のような英雄が、天下大乱の際に初めて取ることができるとものだ。今は唐の太平の御世だ。険阻な海岸地帯に逃れて官軍の矛先をかわし、地を耕し魚を取って命をつなぎつつ時を待つのがよい。もしも、さらに窮したときには、海上の島に逃れる。これこそが万

全の策である』。そう言うと、青虫連中が揃って王輅に賛成しましたな。劉晔に賛成するのは一人もなし。王輅の策が採られ、裘甫はじり貧となり、小さな塞に追い込まれましたな。ここに劉晔は王輅たちを縛り上げ、『わが謀を乱したのはこの青虫どもだ』と、斬り殺しましたな。王式が勝てたのは、ひとえに青虫どものおかげだったのですな」

「青虫によつて唐が助かったとは皮肉な話だ。この後は、たとえ裘甫のような者が次々に出て、いつしか唐が減びるようなことがあるとしても、それはまだまだ先だろう。それにだ、唐が万一滅ぶとして、次の新たな世になるまでには、どれほど長い時間がかかるのか。漢が減んで唐の世になるまでに四百年超える混乱が続いたではないか。そうならないよう、唐は滅びてはいけない。そうは思わないかい」

「俺たちに何ができますかな。青虫は劉晔に斬られました。貢挙に落ちた兄貴は青虫になる資格があつても、俺などは青虫にも及ばない。青虫を罵倒した劉晔も殺されましたな。一つの王朝が減びるような巨大な変化が起こると

きに、一人一人の力では何もできません。何か得体の知れぬものに押し流され、不本意ながら死ぬ他に何ができませんしようか。裘甫も劉晔も王輅もそれぞれの思いはあっても、終わってしまえば、同じ賊の仲間として殺されただけですな。王式が矢の雨を降らせて殺した兵士たちと、その死の無意味さにおいてどれだけの差がありましたよかな。かくて多くの不幸な連中が出る一方で、王朝が滅ぶときに遭遇しても、何の憂いもない逸楽の中に身を置いて一生を送れる運の良い者もいましたよな。逆にですな、新たな王朝が生まれ、世が隆盛に向かうときに巡り逢わせても、財も地位も無縁で惨めな一生を送る奴もいますな。運不運の境は誰にもわかりませんな。確実なのは、王朝の滅びるときは、隆盛に向かうときよりも、不運の者の割合が多くなることでしょうかな。どの道、何があつたところで、千年も経てば誰も覚えてはいませんな。この章華台にどれだけの血が滲んでいるのか、俺たちにはもはやわかりませんからな。俺たちは、せいぜいぼんやりとした懐古の情を抱いて、下手な詩を詠むくらいしかできない。千年先に長安の宮殿跡に立つ者も、同

じょうなものでしょうな」

「それはその通りだろう」

話は遠いところに至った。章華台が造られてから今日までに千年以上の歳月が流れた。そう思えば、千年先を想像するのも全く不可能ではあるまい。しかし、それより遥かに近いこの旅にいつかくる終わりはどう言うことになるのか。韋荘には皆目見当もつかない。千年先の長安に己はいないが、何ヶ月か先の虢州には己がいる。そのときに己は何をするのか。

「当然の真理として、唐は永久に続くものではありません。俺たちはたまたま悪い時代に生まれてしまったと言う、ごく平凡な話ですな」

「そう決めつけるべきではないだろう」

「杜甫は安祿山の乱に遭遇してこの世の終わりであるかのように考えましたな。生まれながらに貧乏臭い男はなはだ貧乏臭いことしか考えられないのでしょうな。それが、杜甫の緊迫感のある詩を生んだのですな。詩にとつては、安祿山が反乱を起こし、杜甫がそこに居合わせてくれたのが幸いでした

な。唐はその後持ち直して、我が祖韋応物は、その後の良き時代を見られたので、杜甫より穏やかな詩を書きましたな。兄貴もこの悪い時代に生まれたのは、不運とばかりは言えません。杜甫のような立派な詩が書けるかも知れませんが

「私には無理だ」

「天下大乱に遭ってこそ優れた詩が生まれ、英雄は名を残しますな。俺のような青虫以下の人間には何ほどのことができましょうか。不本意ながらの死だけとは寂しいですな。変化にうまく乗る変わり身の術を得ますかな。医術より余程役立ちましょう」

「乱れた世の時流に乗るとは、悪しき名を残すだけになるのではあるまいか」
「善し悪しは誰が決めるのですかな。何百年も昔に孔子が善いと言ったことがいまも善いのですかな。昔の人の言葉の滓をいつまでも有難がっていつ何になるのです。劉晔に青虫と罵られて斬られてしまうだけですな」

韋莊は唐の前に漢が滅び去った時代を思う。唐がこれから滅びるとすれば、

そのときと似たようなことになるのか。漢の衰亡を止めようと懸命に戦った武官や文官もたくさんいた。蘭の言う「不本意ながらの死」が溢れた。そうでなかった者が誰かいたか。弟の藹の朗読を思い起こす。田疇だ。田疇は漢代の終わりに生まれ合わせていなければ、平凡な地方の官僚としてささやかな一生を終え、史書にその名を留めることなどなかっただろう。田疇と己を比べれば到底及ばぬのはわかりきったことだ。

「ならばどうしたらいいのだい」

「まずは、これまでに学んだことを忘れるのですな。兄貴は役立たずの滓を頭にいっぱい詰め込んでおりますからな」

「滓かどうかは知らぬが、勉強したことを捨てるとして、次にどうするのだい」

「孔子に恥じるとも、己に恥じめ生き方をするのですな」

「己に恥じめとはどう言うことだ」

「それを人に問うてはいけませんな。己に問うていただきませんと」

従弟は巧妙に逃げたと章莊は感じる。

しかし、ここで蘭に問いを重ねて何でも教わろうとしている己こそが、逃げていくのかも知れない。己がどう生きるのか、己で考えることから逃げてはいけない。

旅に出たのは、本来の己を見つげようとしたからではないのか。それが己自身でできないのなら、虢州の莊園にいるのが嫌で逃げただけになってしまう。

「そうだな。私のことは自分で考えよう。では、そなたはこれからどう生きようと思うているのだい」

「俺ですか。どう生きるかと問われましても、何もありませんな。それが答えですな。わからんとおっしゃるのなら、敢えて付け加えれば、その場で面白いと思うことをするってことですか。そうでなくては、これからの世は、生きられませんからな。仁だの義だの、荷物を背負ってはい、その重みで倒れるだけでしょう。何も重しを持たず、風に任せ、あっちへふ

らふら、こっちへふらふらといけば良い。そんなことをして楽しければ、もうそれで十分ではありませんかな」

「そんなものなのか」

韋蘭は必ずしも本心を語っていないのだろう。さらに追及したところで、これ以上の答えはなさそうだ。

「長々と話しているうちにすっかり暗くなってしまうましたな。今夜はこゝらで寝ますかな」

蘭は立ち上がる。

夜とともにあたりはもう寒い。かなり南にきたとは言え、これからの季節、野宿は難しくなりそうだ。

蘭は馬を繋いだ場所へと下りていく。

郷書不可寄　　わが故郷へと手紙を送れずにいる

秋雁又南回　　雁が南に帰るこの秋に。

蘭が付けてくれた句をつぶやきつつ、韋荘も後を追う。

虢州に手紙を送る気はない。いつか帰るにしても、いまは遠く離れて忘れていたい。虢州での新たな日常が始まる日がくるとしても、いまはまだそれが何であるかを決めずにいたい。蘭の言うように、身軽に風に任せて決めずにいるという手も案外良いのかも知れない。

「何か腹こしらえでもしますかな」

蘭は手際良く火を起こし、鍋を載せ、何かしら煮始める。

韋荘は従弟に任せ、火に見入る。

「明日はどこへいく」

「東に進めば、すぐに洞庭湖が見られましような。湖畔沿いに進んで岳陽城までは二三日でしょうか」

「なるほど。そうすると、どうやら杜甫の晩年の足跡を辿ることになりそう
だ」

「偶然そう言うことになりますかな」

たまたま蘭が杜甫の詩を話題にしたので気づいた。二人の旅にもともと目

指す地も意図した旅程もない。

杜甫は『北征』の詩の旅の後、長安を回復させた肅宗の政府に出仕し、しばらく皇帝の近くで官界生活を送った。しかし、同僚や皇帝と考えの合わぬところがあって自ら職を辞し、以来、死ぬまでの十二年間を各地を転々とする旅に過ごした。安祿山の乱の余燼はくすぶり続け、いつしか唐土に平和が戻り、晴れて都に帰れるのを夢みつつ、それが果たせぬまま、最後は洞庭湖のあたりに漂泊の身を置いた。

杜甫と己の人生に何かしら重なるところがあるとは一度も思ったことがない。蘭の指摘を待たずとも、杜甫の詩が優れているとの認識は韋荘にもある。杜甫の詩と比べれば、己の詩など、確かに蘭の言う通りに、粗い網で掬い上げた萍のようなものだ。せいぜい言葉を弄んでいるだけだ。そのように思うと、詩への情熱が急速に凋んでいく。あの兵士と別れてから今日まで詩に熱心だったのは、たまたまそんな気分がここのところ続いただけのようだ。貢挙のために詩を学んだのだ、杜甫のように人生をそこに賭けているのではな

い。

杜甫の詩を褒めたたえた蘭も、それこそ杜甫とはまるで正反対の男だ。杜甫は信念の人、不器用で融通がきかず、せっかく官職を得ながら、そこに留まれなかった。蘭にはもとより官界に入る気などないが、入ったら入ったなりに融通無碍に泳ぎ回るだろう。風任せを理想とする従弟が、杜甫の詩をこの上ないものと言うのは妙だ。

田疇に心引かれて己も田疇とはまるで違う。二人とも己と異なる人物に関心を抱くのかも知れない。

鍋から湯気が立ちぐつぐついい始める。

旅の終わりはまだまだ先だ。このような日々はきつと二度とないだろう。唐が滅びる前に束の間に得た気ままなこの旅を、嫌と言うほど味わってしまわずに打ち切るのはもったいなさすぎる。

咸通四（八六三）年春、柳絮の舞う中を韋荘は帰った。

號州での五日目の朝、一族の全てを屋敷の前の広場に集めた。

韋荘は壇上に登る。三百の顔が己に向けられる。人々に見られるのを恐れはしない。これからは逆だ。人々が己に見られるのを恐れるようになる。

叔父の韋韜が、ずっと人々の群れから離れ、広場を去っていく。仕方あるまいと韋荘は思う。

つい今しがた、この壇上には叔父が立っていて、「今日からはこの莊園の主人は莊である」と告げた。

そうなることについて、叔父は「それでよかろう」と言っただけだった。

それまで叔父がしてきたのは正反対となるであろうに、韋荘の提案に叔父は何ら異議を唱えず、隠居することに同意した。

薛未亡人や韋荘の妻の言う通り、莊園経営にかけて叔父は確かに「能なし」だった。叔父は叔父なりに苦心し、また理想とするところもあった。上に立つ者は無為であるべきで、それでこそ自ずと良く治まると、叔父は考えてい

た。叔父は人を叱責しない。都の商人に騙されたときも、その商人を見込んで金を借りた老執事を責めなかった。老執事は責任を感じて首を吊り、叔父はますます人を叱るのを自重するようになった。

叔父のやり方は、それはそれで美しくはある。韋荘はそう思うが、これからは違ったことになる、誰の目にも見える形で示さなければならぬ。

叔父はそれを見たくないのだろう。石段を登り、門の内へと消えていく。叔父には申し訳ない気もある。もう始まったのだ。旅の終わりに考えたことを、その第一歩からしてひるむわけにいかない。

韋荘は傲然と胸をそらせる。

「いまこれよりこの私がこの荘園の主人だ。そうなったからには、ここはすでに昨日までと同じではない。このことをよくよく心得てほしい」

韋荘の声が広場に響く。弟の韋藹には及ばないにしても、もともとの良い声を旅の終わりに磨いた。

見渡すと、多くの人々はぼかんと口をあけている。まだ何が起こっている

のか、飲み込めていないのだろう。試験に落ちて誰にも顔を見せられず、熱を出して寝込んでしまったあの韋荘と、ここに立つ韋荘は別の人間であると、思い知らさねばならない。

「我が父君が亡くなられてより、韋家の莊園はただ一箇所、ここ號州だけとなった。遠くは宰相にもなった我が先祖に恥じぬよう、我が韋家は昔日の繁栄を取り戻さねばならない。そのために私がこの主となった。これまでのやり方にあくまでもなずみ、私のやり方を不満とする者は、ここから出ていくのもよい。出ていく前に、これまでに我が莊園を損なってきた分は返してもらおう。それは覚悟してもらわねばならない。罪は罰によって償ってもらおう。」

誰がいかなる罪を犯したか、全てを私は知っている。容赦は一切しない」
人々は口を閉じる。

ほとんどの者に思い当たることがあるはずだ。叔父の理想のもとで、自墮落な者が得をしてきた。楊爺のような生真面目に働く少数者は馬鹿にされ、何もせず威張っているだけの者に人々は靡いた。

言うだけでは、聞いておしまいである。

「私の本気であるのは、ここで直ちに見るであろう。よいか」

韋荘は広場全体に視線を巡らせる。人々はそれを避けるかのように目を伏せる。

「容赦しないと知ってもらうために、最も罪の重き者二人をここに呼び出し、皆の前で処罰を下す」

人々は左右に目を配る。三人の中に自分が入るのではないか、できれば隣の者であつてほしいと願っているのだろう。安心するがよい、三人はすでに捕まえてある。

韋荘は少しばかり焦らすように沈黙を保つてから、

「ここに連れてこい」

手を上げ合図を送る。広場の脇の林の内ですんと太鼓が轟く。

楊爺が現れる。片手に太い棍棒を握り、片手に縄を持つ。後ろに、一本の縄に繋がって、胴と腕を縛られた男が引き出される。その背を屈強な若者が

押しやる。よろよろと、

「この俺さまをどうする気だ」

縛られた男が叫ぶ。

呂律の回らぬ声に、広場の者たちは誰であるとすぐに了解する。いつも酔っ払っている伍武の爺さんだ。

壇の下にはほととした空気が流れる。伍武なら罰せられて当然だ。

前からは縄で引かれ、後ろからは手荒く押され、そうでなくても、一年中酒の抜けたためしのない伍武の足取りはおぼつかない。

ぐだぐだ言う伍武を、

「黙れ」

楊爺が一喝する。

伍武は唾を吐く。

「黙れだ。誰に向かってそんな偉そうな口を聞くのだ。おまえは楊金ではないか。銭で雇われた新参者め。この伍武さまに、黙れとはよく言ったもの

だ。韋家代々大恩のあるこの俺さまに向かって、後でどういうことになるか、わかってしているのか」

「どういうことになるのか、わかっていないのはそなたである」

壇上より韋荘が言う。

声の降ってきた方に伍武は体を向け、斜めに見上げる。

「これはお坊ちやまでございますか。この伍武さまをどうなさるお積りでございましょうか」

「処罰する」

「へえ、大恩あるこの俺さまをですか。それは面白いことでございます」

伍武はからからと笑う。

「笑っていられるのもいまのうちだ。さっさと進め」

楊爺が棍棒で背中を小突く。

「ふん。楊金など引っ込んでいろ。いま俺さまはお坊ちやまとお話をしているのだ。そうでございましょう、お坊ちやま。俺さまはお坊ちやまとお話を

しているのをごいいます。お坊ちやま、俺さまの言うことをよく聞いてください。もしもここにですよ、お坊ちやまのお父さまとお爺さまが甦ってこれ、この伍武さまが縛られているのを御覧になりましたら、何とおっしゃいませうか。お考えになってください。お二人はお嘆きになって、お二人揃って、お坊ちやまをお叱りあそばされるに違いありません。そうではございませんか」

伍武がこのように言い出すのは先刻承知のことだ。

「連れていけ」

韋莊は平然と言いつつ。伍武は睨みつける。

伍武が威張っているのは、祖父の韋中瑩、父の韋韞の二代にわたって、韋家の当主の命を救ったのが伍武であるからだ。祖父も父も命の恩人である伍武を特別扱いした。祖父は都の乱暴者にからまれて危なかったところを、若き伍武が勇敢にも戦って救った。これはなかなかの手柄と言つてよい。父の韋韞の場合は、まだよちよち歩きのころに荷車に跳ね飛ばされかけのを、た

またま酔つ払ってふらふらしていた伍武が抱きとめて事なきを得た。二代にわたる命の恩人であると、伍武は鼻にかけ、誰の言うことも聞かなくなつた。

楊爺が縄を強く引き、伍武はよろける。

「お坊ちやま、よおくお考えください。大恩ある俺さまを縄で縛るとは、お父さま、お爺さまに大変な不孝を働くのと同じではございませんか。お二人とも嘆いておられますぞ」

「黙れ」

楊爺は棍棒で伍武の頭を叩く。

「何をする」

伍武は怒るが、遅れて痛さを感じたのか、腰が砕ける。

「今度余計なことを言ったら、これくらいではすまないぞ」

楊爺の妥協を許さぬ声に、伍武は仕方なく口をとじる。

伍武はここで命の恩人であることだけを言い募つたが、伍武の家と韋荘の家の関係は深い。唐土に住む民には兵役が課せられている。韋一族も何人か

を兵士として出さなければならぬ。宰相になった韋待価は軍人から大出世した人物で、韋応物は都の近衛兵として無頼の生活を送った。韋応物の次の代からは、韋姓の者は兵士にはならず、伍の家がその分の兵役を引き受ける慣習ができあがった。伍武も何年間か西方で兵士として暮らし、足を痛めて帰ってきた。いまは伍武の息子や甥が兵士として出ている。辛い兵役を一手に引き受けてくれている伍の家族に、韋家としては引け目を感じるところがある。伍武はその伍家の最長老である。

韋荘は己の決心の固さをこれ以上にならない明瞭さで示そうとしている。

伍武が壇より西に引きずられていくと、同じ縄に繋がって林から小柄な男が出てくる。顔を隠すようにうつむいているが、これも誰だかすぐにわかる。

范執事だ。この男が、莊園の金や作物をちよるまかしているのは公然たる秘密である。酔っ払いの伍武とともに罰せられて当然の男である。

范執事は伍武と違って何も言わない。元来は几帳面な小心者である。韋韜が万事鷹揚であるところから、つい悪事に走り、深みにはまってしまったの

だ。だからといって、許せはしない。

広場に集まった人々は、自分たちが罰せられる三人に入っていないと、顔がやや明るくなり、では三人目は誰なのかと、好奇のまなざしを林に向ける。

どよめきが広がる。華奢なからだに真っ青な顔、おどおどした目で周囲を見ている。出てきたのは韋愠だ。先に死んだ叔父が妾に生ませた子だ。

伍武も范執事も韋家の使用人だ。主家のためにならぬことをすれば処罰されて当然だ。しかし、韋愠は韋家のお坊ちやまの一人だ。韋荘の従弟だ。愠にどのような罪があるのか。愠の母は薛未亡人によっていびり出され、愠はいまも薛未亡人に苛められている。罰せられるよりも、人々の同情を受けるべきであろう。

韋愠は縄で引かれるままに悄然と歩む。後ろにつく男は愠を押ししたりしない。

三人は壇の西側に並ぶ。

「これより私が三人を処罰する。よく見るがよい」

韋莊は壇を下りる。

「三人を座らせ、上体を裸にしろ」

韋莊が命じ、一人に一人付いた若者が上からぐいと肩を押さえる。

「何をする」

伍武が抵抗する。

「黙れと言ったはずだ」

楊爺が棍棒で背中を撃つ。鈍い音がし、伍武はへたれこむ。

范執事と韋慍は自分で地に座して震える。二人とも諸肌脱ぎにさせられる。

韋莊は上衣を取り、脇に立つ韋蘭に渡す。さらに袖より両腕を抜いて上体

を露わにする。隆々と盛り上がった筋肉が朝日に輝く。これが貢拳に落ちて、

人々の目を避けて弟の家に籠って寝ていた韋莊なのだろうか。

韋莊は杖を手にする。罪人を叩く杖は長さ三尺五寸と決まっている。

韋莊は三人の罪状を挙げ、それぞれの罪に合った杖撃ちの数を順に宣告す

る。伍武、范執事については皆の知る通りの罪だ。韋慍は気弱に見えながら、

実は虢州の町にしばしば出かけ、悪い連中との遊びで多額の借銭をつくり、しかも、ある良家の娘のかどわかし事件に加担した。奇妙なつながりをあちこちに持つ韋蘭だけが前から知っていて、楊爺がここ数日間にそれが事実であるのを確かめた。

伍武一人がまたぐだぐだ言い出す。韋莊はしばし目を閉じて、先ほどの繰り返しを聞き、

「それくらいでよいだろう」

杖をびゅんびゅんと振るい、

「そなたからだ」

伍武に向かって言う。

「お坊ちやま、お父さまとお祖父さまが」

叫ぶのも構わずに、びしりと背中を撃つ。伍武は呻く。唸りつつ、

「韋中瑩と韋韞がここにいたら、おまえをこっぴどく叱るだろう」

韋莊の祖父と父を呼び捨てにする。

再び伍武を撃つ。韋荘の腕と胸の筋肉が躍動する。第一撃とは力の入れ方が違う。

伍武は「うん」と呻き、今度は罵れない。背が一瞬にして赤くなる。

韋荘は撃ち下ろす。伍武の肌が破れる。また撃つ。鮮血が飛ぶ。また撃つ。

伍武は呻くこともできず地面にころがる。

「まだ数には足りないが、これくらいにしておこう」

酒で弱った老いた伍武はすぐにのびてしまった。

次は自分の番だと知る范執事が悲鳴を上げる。

韋荘は杖を范執事に向かって振り上げる。范執事は大声を発し、許しを請う。

構わず韋荘は撃ち据える。伍武に比べればかなり手加減してやる。それでも范執事はすぐにのびてしまう。

二人が倒れてしまって、韋愠は齒の根も合わないくらいにふるぶると震える。

韋莊は杖を韋慍の顔にさし向ける。慍は「ひい」とひと声、わあわあ泣き出す。

「ここで泣くくらいなら悪いことをするな」

杖を高く振り上げる。

広場から女の声が響く。

「従弟を撃つて何が面白いのです」

見るまでもない。妻だ。

「面白くてやっているのではない。罪ある者は許せない。それだけだ」

韋莊は独り言のように言う。

「不人情にも程があります」

妻がまた叫ぶ。

「その通りだ。私は情を捨てた」

韋莊は杖を振りおろす。范執事よりもさらに力を入れていない。韋慍の真

っ白な肌はすぐに赤く腫れ上がる。

「やめなさい」

妻のこの声が合図のようになり、二発目を下す。

韋愠が女のような悲鳴を上げる。つられて、一族の女や子どもたちの間からも悲鳴が漏れる。

韋愠は泣き叫び、涙と涕でぐちよぐちよになった顔でひいひいと詫びる。韋荘は二発目を食らわせる。韋愠は地面にころがる。

「もうそれで気がすんだでしょう」
妻がまた叫ぶ。

韋荘は、倒れて血で染まった韋愠の背をさらに撃つ。さらにもう一回撃つ。血が飛ぶ。愠はとつくに気を失っている。

韋荘は一息つき、額の汗を拭う。

「私の言うことを聞かぬ者は、いつでもこうなると心得るがよい」
人々に向かって言う。広場は静まり返る。

「ただし、心を入れ替えるならば、この三人として許さぬものではない」

韋莊は杖を蘭に渡し、衣服を整える。

己は変わった。己はこのように変って旅から帰ってきた。

三人を撃った音は、屋敷の内に入った叔父の耳に達しただろうか。叔父はどう受けとめたか、韋莊の気持ちにひっかかるものがないわけではない。二人の弟も、楊爺もこんな己にとまどっているだろう。

しかし、新たな己が、こうして決して後戻りできないかたちで始まったのだ。この號州の莊園は昨日までの莊園ではない。新しい己のための莊園である。